

妙曲陸摩走琵琶歌集

本能寺 石堂丸 山崎 特
城山 廣瀬中佐 小島 山崎
小敷盛 常陸丸 小島 山崎
權持 以迄 遠
上村艦隊

~~270
367~~



始



特100

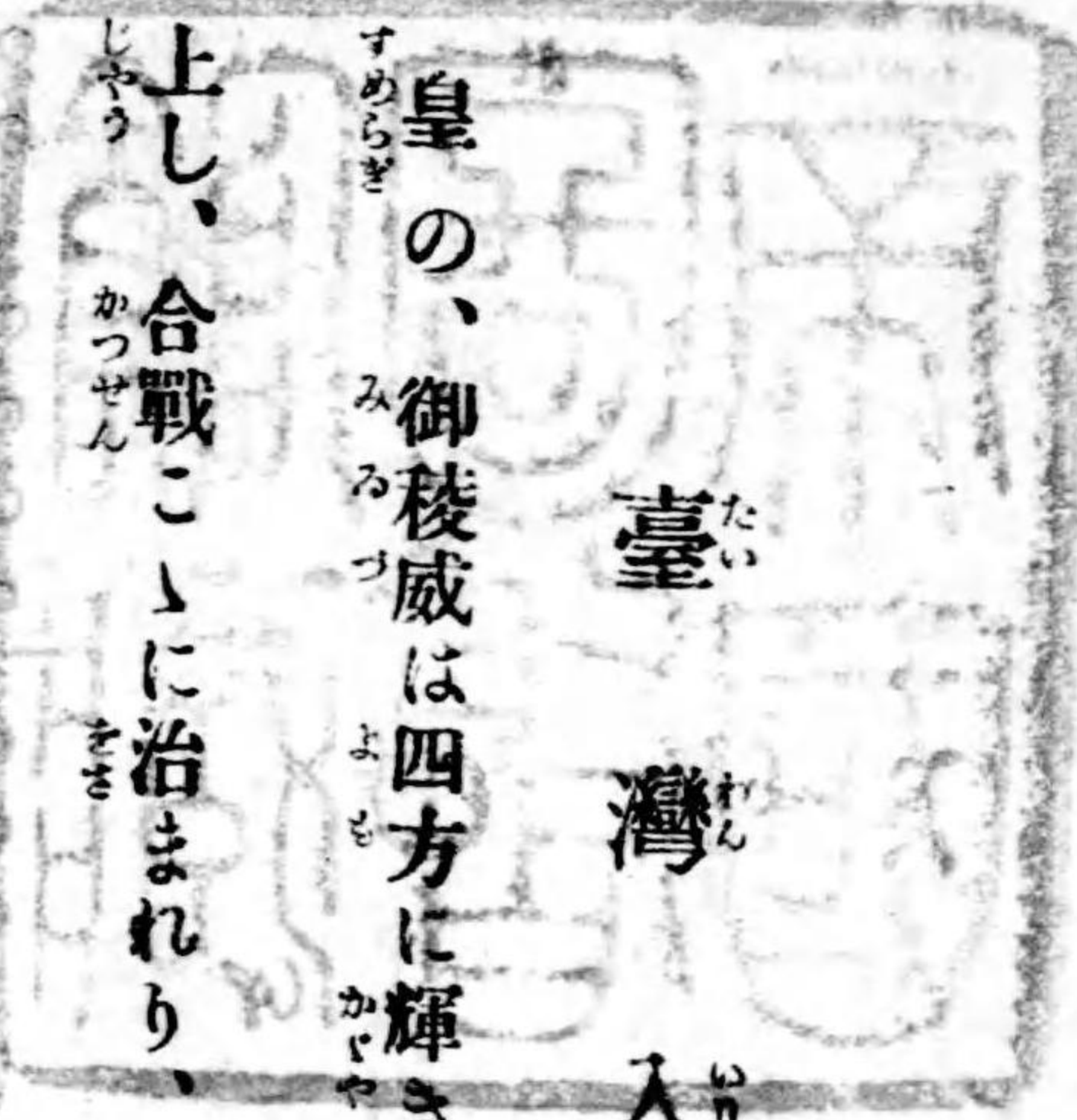
313

(1) 新曲琵琶歌

音譜新曲琵琶歌

好曲生

編 大正 1.9.5 内交



臺灣入

皇の、御稜威は四方に輝きて、清國遂に和議を乞ひ、臺灣島を献

上し、合戦こゝに治まれり、君が御代こそ目出たけれ、臺灣島の土

賊共、龍車に向ふ蟻螂の、斧を揮ふと聞えしかば、征討の師をぞつ

かはさる、近衛兵の精銳を、率ゐて御渡海めされしは、陸軍中將大

勳位北白川の宮とて、金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸、幕營

ありし其の迹に、木を削りてぞ記さるゝ、炎熱燬くが如き日に、三

貂角の嶮岨をば、馬にも召さず越へたまひ、大雨頻に降る時も、濡

れにぞ濡れて進まるゝ、士卒これに感激し、病兵さへも立ち上り、

命惜まず進軍す、處々の壘に籠りたる、賊兵どもの打ち出す、彈丸

は雨か霰か白雪の、降り注ぐが如くにて、砲煙暗く天を蔽ひ、百雷

齊しく落つるに似たり、宮は矢石を冒しつゝ、突貫せよと下知あれ

ば、川島少將小島大佐を始とし、勇み立ちたる近衛兵、我先にと奮

進し、賊の本營にと突いて入る、賊兵之に氣を吞まれ、右往左往に

逃げ散りて、降参する者數知れず、大砲小銃の戦利品、山を築かん

許りにて、勝鬨とツとあげれば、宮は此時悠々として、基隆城に入

らせ給ふ、斯くて六月十日には、臺北城を陥れ、七月新竹を占領
 し、翌くる八月には、彰化臺中の兩府を定め、十月の初めつ方、臺
 南さしてぞ進まるゝ、天熱くして瘡痍多く、地嶮しくして糧道絶ふ
 千辛萬苦の其中に、宮は士卒と食を分ち、晝汗馬に鞭をあげ、夜は
 荒野に露營して、戎衣の袖に月を宿し、たゞ國の爲め君の爲め、平
 定の策をめぐらし給ふ、嗚呼痛はしや悲しやな、竹の園生の御身に

て、餘りに艱苦を積ませられ、遂に御病に罹らせ給ひ、日々に重ら
 せ給ふにより、御供の人々打ち驚き、都に歸らせたまふやう、頻に
 御諫め申せども、宮はいつかな聞し召さず、我官軍の將として、賊
 徒平定を見ねうちには、假令臺灣の土となればとて、我のみ士卒を打
 ち捨て、争で都に歸らんと、籠に召されて進まるゝ、御臨終のそ
 の際に、賊徒平定と聞召し、宮はにっこり打ち笑みて、萬歳と只一

と聲、叫び給ひしばかりにて、敢なく天に昇らせたまふ、傳へ聞く

日本武の故事を、今日の前に見まゐらせ、國中の民も兵士も、慟哭

せぬはなかりけり、さりながら昨日今日とは思はねど、老少不定に

貴賤なし、但だ人は名こそ惜しけれ、皆人は名を千歳に残せかし。

臺北悠悠々仁政成 皇軍到處歡聲湧

旭光將被臺南地 殲彼巨魁一安萬生

と宮の歌ひたまひし如く、盛功威烈後の世に、輝きわたるぞ有り難

き、北白川の水は逝きて歸らねど、月影永く澄み渡り、光は世々に

流るらん、光は世々に流るらむ。

川中島

天文二十三年、秋の央の頃かよ、上杉謙信は、八千餘騎を従へて

川中島に打て出づ、我此度の戦は、武田信玄を追つめて、親しく雌

雄を決せん、渦巻きかへす犀川を、渡りて陣をぞ取りにける、信

玄は此事を聞くより早くも、二萬餘騎にて打ち迎ひ、砦を固めて戦

はず、謙信は氣をいらち、村上義清に言ひ舍め、月影暗き山々の、

草葉の露を分させて、彼方此方に兵を伏せ、樵夫に擬せし兵士を、

出して甲斐の兵營に、近附かしむれば甲斐の兵、策略とは露知らず

朝霧の間に追まくる、待ち設けたる伏兵は、時こそ來れと勝鯨波を

隆とあげつゝ引つゝみ、袋に物を取る如く、一騎も残さず打ち取つ

たり、信玄怒りて軍勢を、雲霞の如くに繰り出せば、謙信も備へを

立て、打ち向ふ、龍躍りて雲を起し、虎嘯きて風を呼ぶ、勢破竹の

如くにて、入り亂れ入り亂れ、攻め戦ふ有様は、颯風砂を巻き、百

雷岩を抜くに異らず、越後の勢退けば、甲斐の軍之を追ひ、甲斐の

軍退けば、越後の勢之を追ふ、兵を合すること十七度、何れを勝と

しらま弓、引くか見えし信玄が、一手の勢の幟を伏せ、川を渡り
 てよしあしの、隙を竊かに忍ばせて、勇立たる謙信の、麾下近く進
 み寄り、面も振らず切つて入る、麾下の軍勢は、思はぬ兵に敗られ
 て、走る跡より甲斐の勢、鯨波を作りて追かくる、宇佐美定行是を
 見て、猛虎の如く憤り、憤馬を驅つて大音に、我手の勢に下知をな
 し、敵の横合より、無二無三に突入て、淵瀬もいはず追ひ落す、

信玄度を失ひて、流を亂して走る所を、謙信只一騎、黄襖驪の遅ま
 しきに鞭をあて、豎子何く迄逃ぐるぞと、いひも果さず切つくる、
 信玄刀を抜くに違なく、軍配扇にて受けたれば、團扇は二つに折ら
 れたり、

降ると見て傘とるひまもなかりけり

河中島の夕たちの雨

と謠ひし如し二の太刀は、はや肩先に切りこみぬ、呀といふ間に信

玄の、命は岩に碎かるゝ、泡と消えなん危きを、救はんとして軍兵

が、心は矢猛に進めども、水駛くして近寄れず、大將原大隅、槍を

延ばして謙信を、突はしたれどあだ突し、斯くてはならじと槍を舉

げ、只一打にと打たりしに、馬にあたりて馬逸す、謙信馬をしづめ

むと、手綱かいくる其隙に、信玄は虎口を逃れ去りにけり、

鞭聲 肅々 夜渡 河

曉見 千兵 擁 大牙

遺恨 十年 磨 一 劔

流 星 光 底 逸 長 蛇

斯く信玄を、打洩したる謙信が、心の中は如何ならん、思ひやるだ

に哀れなり、信玄は肩の痛手に耐へかねて、其夜の中に軍勢を、纏

めて出る月影に、道を求めて遙々と、我が故郷に歸りけり、我が故

郷に歸りけり。

金剛石

皇后陛下御製

金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらん、人も學びて後にこそ、誠
 の徳は顯るれ、時計の針の絶間なく、廻るが如く時の間の、暑惜み
 て勵みなば、如何なる業かならざらむ、水は器に従ひて、其様々に
 なりぬなり、人も交はる友により、善きに悪きに移るなり、己にま
 さる善き友を、撰び求めて諸共に、心の駒に鞭うちて、學びの道に
 進めかし。

白虎隊

花は櫻木人は武士、散るべき時に散らざれば、いかでか人に惜しま
 れむ、爰に會津藩士の子弟にて、白虎隊と稱へしは、日新館の青年
 を、撰抜したる一團にて、年齢僅か十五六、十七歳を頭にて、忠勇
 義烈比ひなし、學びの窓に筆おきて、劔を把つて青天を、睨む姿の

雄々しくも、こゝろ堅き心の結ばれて、しゅしやう首將の許に馳せつけぬ、はや早や此の

時は若松の、あたりあたりは敵の領となり、じやうない城内あはれ兵は竭き、のこ残るは

老木の梓弓、かよかよはき婦女子ばかりなり、しゆくん主君の安危を己が背に、

負ふて其身を顧ぬ、せうねんたい少年隊の勇々しくも、けつしたい決死隊の左翼となり、戸戸

の口原に打ち向ひ、むら群る敵に斬つて入る、せり折しも吹くや荒風の、あめ雨

も一時に篠を衝き、しんどう晝尚暗き修羅の場、しんどう雷鳴山岳を震動し、たちま忽ち放

つ電光の、あつ夫にも勝る早業の、ひらめ閃く影は白虎の如、たけ猛りに猛ける丈

夫が、いき息をもつがす戦ふも、たか寄せ来る敵は數多く、ふせ防ぐ味方は限り

あり、わづか僅に一方を斬りぬけて、い生き残る者十餘人、けい慶應戊辰八月の

後の三日の東雲に、たさ瀧澤峠の險を超え、すう數ヶ所の痛手に逆る、ち血汐

は兩の袖を染め、い兵糧だにも續かねば、う飢と疵とに疲れ果て、つ折れ

たる刀を杖にして、い飯盛山に攀ち上り、かく鶴城遙に見渡せば、こ黒煙天

に漲りて、昨日に變る今日の様、あはれ望みに盡きたりな、主君を

始め奉り、我が父母に今生の、別れを告げんと跪き、涙ながらに伏

し拜む、心の中や如何ならん、此の時飯沼貞吉の、取り出したる短

冊は、母の賜ひし和歌の一首、此の世の別れと読み上げて、我事こ

ゝに止みたりな、最早何せん術なしと、忽ち光る一刀を、小脇にぐッ

と突き立て、物の見事に引き廻す、篠田儀三郎も忽ちに、文天祥

が正氣の歌、聲朗かに吟じけり、手疵に惱む石田和助は、篠田の聲

に莞爾と笑み、我も最後の吟聲を聞え上げんと高らかに、

人生自古誰無死

留取丹心照汗青

と之も同じく天祥が、零丁洋の一節を、吟じ終るや一刀を、小脇に

ぐッと突き立てぬ、篠田は之を見るや否、秋水逆手に我喉、束も通

れと貫ぬきぬ、扱又林八十治と、永瀬雄治の少年は、豫て交り深け

れば、冥途も共に抱き合ひ、曳と一聲刺し違ふ、永瀬の尖や鈍か

りむ、林は傍を見返りて、誰ぞ介錯をと乞ひければ、野村駒四郎飛

び蒐り、忽ち首を打ち落とし、返す刀に潔く、腹掻き切つてぞ果てに

ける、其他も之に前後して、何れも年は蕾なる、若木の花を誘ひ來

る、哀れ無情の風吹きて、いと目覺しく自害して、秋の錦を織る山

を、染むる血汐となりにけり、之より前に魁けて、戦没したる少年

の、屍を拾ひ集め來て、この丈夫と相竝べ、飯盛山の絶頂に、輝く

碑銘は後の世の、士氣を鼓舞する基にて、今に傳へて惜まるゝ、

少年團結白虎隊

國步艱難成二堡塞

黄塵掩天白日暗

警報交至四海内

忽捲二風雨一軍來

巨砲連發僵屍堆

白虎一隊自虎健

殺生過當何壯哉

衆寡不敵戰且卻

身裹二創痍一口舍藥

腹背皆敵今何行

杖劔間行攀二丘叡

南望二鶴城一黑煙颯

社稷已亡我事止

一死唯應償君恩

十有六人心肝鐵

遙拜二鶴城一淚潜々

意氣從容屠腹死

曇りなき月日は照らせ國の爲

さらす屍は朽ち果つるとも

地 嗚呼天何ぞ丈夫の、義氣と誠を此のまゝに、空しく暗に葬むらん、

死せしと思ひし飯沼の、武運や未だ盡きざりけむ、尋ね來りし或人

の、爲に一縷の玉の緒を、繋ぎとめられ海原の、底より深き創口の

癒ゆるがまゝに此のさまを、事も細に世の中に、知らしめたるは天

なりと、其名は今に香りけり、萬世不朽の白虎隊、名も香はしき足

引の、大和櫻の花と散る、其の真心の紅は、紅葉に耻ぢぬ若葉ぞと

惜しまぬものとなかりけり、惜しまぬものこそなかりけり。

頼朝七騎落

蛭ヶ小島の浦浪に、憂き艱難の年を経て、勢烈しく雨を呼び、雲を
 起さむ潜龍も、天に昇るの時を得ず、石橋山に翻す、旗は嵐に吹き
 折られ、ちりぐくになりし散兵を、集むる力なくくも、頼朝主従
 身を逃れ、真鶴ヶ崎にぞ向ひける、治承四年の秋の頃、遙か安房路
 を志し、身は捨つるも捨て難き、股肱の臣を見返れば、田代信綱、
 新開の治郎忠氏、土屋の三郎宗遠に、土佐坊昌俊、岡崎四郎義實と

土肥の次郎兼平、同じく遠平に、頼朝を合せて八騎なり、頼朝は船
 中隈なく見わたして、如何に實平、思ひ出づれば我が祖父の、爲義
 公は保元の亂、父の義朝公と申せしは、名のみ平治の戦に、主従八
 騎にて落ち給ふ、思へば我も八騎なり、至つて不吉の徴なれば、誰
 ぞや一人を下すべし、實平つくぐ思ふには、何れも君が御爲には
 骨を埋め其名をば、埋めざるべき忠臣のみ、誰を選ばんやうなけれ
 ば、陸地に近く居並みたる、岡崎四郎に談すれば、四郎なかく肯

き入れず、われ 我の皮肉は落ちたれど、きみ 君の爲には老いざるべし、お 其の
ごせんたつみ 御先達見届くるまで、いか 争で此處をば動くべき、こ 此の役は二つの命を
も 持たれたる、おんみ 御身の外に誰かある、それがし 某も昨日までは、いのち 二つの生命持
ち たりしが、ひさ 一つは君に捧げたり、それ 夫を如何にと申しなば、いしはしやま 石橋山
た の戦に、わがこ 我子の與市義忠は、てき 敵の俣野と引ッ組んで、つひ 終に討死致し
たり たり、おやこ 親子は同體二つの生命、み 見れば實平殿、おやこ 親子諸共在さずやと
り 理の當然に實平は、たちま 忽ち我子に命すれば、さほひら 遠平も君を思ふの一念に

ち 父の云ふこと聞かざれば、さほひらせんがたつ 實平詮方盡き果て、しか 然らば己れ残らん
と と、い 云ふを聞たる遠平は、ち 父を見すく殺さんこと、こ 子たるの道にあ
ら らずとて、ち 泣々命に従へり、てき 敵の大勢打ち出でければ、さほひら 實平猶豫も
なし なし兼ねて、か 鎧の袖に降りかゝる、なみだ 涙の雨を打ち拂ひ、うちしに 討死せよと
い 云ひ捨て、ふね 船の纜切つてけり、かくこ 覺悟の前とは云ひながら、きみ 君と父と
に に生き別れ、い 便り渚に鳴く千鳥、こゑ 聲もかなしく聞えけり、か 彼の松浦
佐 佐用姫も、さよ 此の遠平も限なき、こ 千古無量の歎をば、なみ 波の上にあや残す

らん、船の中なる人々も、坐ろに涙を催せば、鬼神を挫ぐ實平も、

親子の絆絶ち難く、胸にせき来る悲しみを、色にも見せじと焦心る

様、諭へて言ん方便なし、弓張月の影薄く、消ゆる思の船路には、

沖なる浪の音までも、関の聲かと疑はれ、覺束なくも主従共、目ざ

す陸地も白雲の、中より見ゆる兵船は、和田の小太郎義盛が、私に

心を傾けて、君の行衛を尋ねんと、漕ぎ出したる船なれば、忽ち追

ひ付きしかくくと、誠面にあらはれて、申し出づれば主従共、暗夜

に燈火得し如く、打ち悦びて諸共に、程なく陸にぞ着きにける、此

時義盛申すやう、如何に實平殿、御身の忠義は云ふばかりなく、此

の義盛にまで日頃より、心を盡し給ひてし、報の爲と船底より、死

せしと思ひし遠平を、差し出ししければ實平は、夢かとばかり驚きぬ

其驚きは左る事ながら、昨日大場が手勢もて、君の御跡追ひける時

其の軍勢に某も、紛れ込みつゝ打つて出で、者に控ふる若武者を、

見れば健氣なる此御子息、遠平殿にてありければ、忽ち駒を駆け寄

せて、生捕る體にもてなして、此處まで伴ひ候と、いと懇に言ひければ、實平雀躍なして勇み立つ、居竝ぶ人も頼朝も、皆喜びを夕暮の、月の盃とりづくに、所望されつゝ實平は、起つて一さし舞ひにけり、是れ兵衛佐頼朝公、主從僅にたゞ七騎、身を捨てゝこそ浮ぶ瀬の、天運こゝに運り來て、源家の榮引き起す、始めとこそは知られけり

毒 饅 頭

地 笑へば子女も懐しみ、怒れば虎も怖れしむ、英邁偉絶の豪傑も、かせぬものは涙なり、茲に加藤肥後の守清正は、知遇の恩に身をすてゝ、四百餘州を我が駒の、蹄に蹴むと勇みしも、醒めて果敢なき夢なわや、哀れ太閤世を去りて、世嗣の君は幼し、石田小西の小人等、必らず事を誤またむ、一度は死するこの身體、捨てゝ甲斐ある時や來む、されど仁義の深き家康に、心の弓も引き切れず、さりて幼君も捨てられず、心二つ身は一つ、流石鬼神の清正も、困じ果

て、居たりける、中干是より曩に京都なる、二條の城に幼君が、成ら
 せられたる其時に、御供なせし清正に、豊國神社の御供物と、云ひ
 てもてなす毒饅頭、地毒とは知れど家康の、股肱の臣の澁川は、夫れ
 とは知らで己まづ、毒見をなしてすゝめつる、其真心をいなみかね
 一つを取りて味はへば、からだ身體は日々に衰弱し、とても餘命は永から
 じ、いのち生命ある中今一度、最後の御目見得たまはりて、歸國の御暇願
 はんと、かたざり片桐市之丞且元と、共に出仕をなしにける、中干此時幼君の秀

頼公は、よりこう今年漸く御七つ、地淀君付き添ひ出でまして、たいかふどの太閤殿の果敢
 なくも、御他界ありし其後は、頼みきつたる御身まで、歸國をなす
 は家康の、いへやす威に恐れてのことなるか、但し又外に望みありての事な
 るかと、中干恨も含む一言に、地清正伏して申すやう、朝鮮までも武名を
 ば、どようか轟したるなれの果、いかでや恐れ申すべき、且つ又外に望みも
 なきからだ身體、いへやすこう家康公と申し奉るは、じんぎ仁義に富める御大將、無道の事は
 なされまじ、中干千に一つもなされなば、大干大阪城の鐵壁に、中干おとらぬ程

の且元あり、大干老いはしつれど此の清正、他事に見過し申さんや、第

一番に馳けつけて、敵を蹄にかけ散らし、御心休め申さんと、いと

頼母しき言上に、歸國の願ゆるされぬ、裂帛一聲不如歸と叫ぶ、山

時鳥血に啼くも、我が身の上を清正は、心に思ひあきらめて、秀頼

公に打ち向ひ、此の清正のなき後は、只且元の諫言を、心寛くも容

れられて、徳川殿を父君と、仰ぎ給ひて關東に、必らず弓をひかせ

給ふたと、いと懇に申し上ぐれば、秀頼公は聞し召し、爺の言葉は

守れども、病の爲めに歸國せば、最早こゝへは參らぬか、病つもの

ば自らが、看護をなして遣はさん、國に待つものあるならば、そは

呼び寄せよと仰せける、鬼神を欺く清正も、御側に侍ふ且元も、聞

き居たまひし淀君も、胸も張り裂く思にて、皆一同に打ち俯しぬ、

果しなければ清正は、心を鬼と取り直し、御暇申して出でければ、

秀頼公は立たせられ、爺よくと後を追ひ、袖を引きてぞ泣き給ふ

猛虎を挫ぐ清正も、幼き御子の腕には、引かれて元の坐に歸り、秀

頼公を抱き上げ、つくく顔を見上げる、頑是なき秀頼公、うるむ
目元に清正の、鬚に縋りて別れをば、惜み給ふぞいちらしき、
御所持の中啓を、形見に取らせ遣はすと、下し給へば清正は、
立てず伏し拜む、嗚呼幼君が斯程まで、慕ひ給ふ清正が、無二の心
の誠より、現れ出づる光にて、君に仕ふる人臣は、斯くありてうも
のと思ふなり、斯くありてうものと思ふなり。

別れの國歌

共に眺めし月影も、今は屍の上に照る、光も何時か浮雲に、隔てら
れつゝ野も山も、風肅々と腥き、新戰場は朧夜の、春とはいへど尙
寒し、爰に戦後の奉天府、恩賜の緋帯かけ巻くも、綾に畏き皇國を
護る譽の負傷兵、深手淺手の其中に、悲壯悲慘を極めしは、野戦病
院の手術臺に、鮮血淋漓と逆り、骨は碎けて肉破れ、見るに堪えざ
る重傷の、一兵卒は横はる、夜露を拂ふ青柳の、絲より脆き玉の緒
を、少時なりとも繋がんと、軍醫は進み懇に、應急手當施して、誠を

こめて言へるやう、苦痛は如何に堪え得るや、言ふべきことのあら

ざるかと、優しき言葉や通じけん、苦痛に閉ぢし眼を開き、外に言

ふべきこともなし、早く癒して國の爲め、再び戰場に立たしめよ、

地 答ふる聲の微かにも、精神こもりて力あり、軍醫は點頭き且つ進み

魔酔劑は徐に、取り出されて施され、一つ二つの數取を、命せら

るれば懶氣に、三つと數へて今は早や、夢幻の人となる、時來れり

と云ふまゝに、左足を見事に切斷し、忽ち小刀取り直し、右臉關節

の切開を、試んとする一刹那、呼吸脈も衰へて、薬の効顯も見えざ

れば、軍醫は刀を抛ちて、嗚呼事已に終れりと、涙ながらに見詰む

れば、手術臺上花と散る、大和武夫は夢ながら、陛下の萬歲唱へつ

と、謠ふが如く語るが如く、

君が代は千代に八千代にさゝれ石の

いはほとなりて苔の蒸すまで

此の世の別れに君ヶ代を、奏する聲も絶々に、悲しむが如く喜ぶが

吟替

此の世の別れに君ヶ代を、奏する聲も絶々に、悲しむが如く喜ぶが

吟替

此の世の別れに君ヶ代を、奏する聲も絶々に、悲しむが如く喜ぶが

吟替

此の世の別れに君ヶ代を、奏する聲も絶々に、悲しむが如く喜ぶが

吟替

此の世の別れに君ヶ代を、奏する聲も絶々に、悲しむが如く喜ぶが

吟替

如く、或は高く又低く、苔の蒸すまでの七文字を、終ると共に忠魂
は、天の一方に飛び去りて、残るは名のみ計りなり、是れ此の兵士
は福知山、聯隊區より出身の、姓は杉山名は忠吉、國家の外に餘念
なき、いと麗はしくかぐばしき、中干切り最期を此に遂げにけり、中干涙ある者
忘るゝな、鷺の棲みにし奉天も、國に殉へし英雄の、屍に代へしも
のなるぞ、切り屍に替へしものなるぞ。

本能寺

麻と亂るゝ戰國の、人としいへば誰も皆、馬を養ひ兵を鍊り、切り糧を
收めて劍を磨す、頃は大正十年夏五月、徳川家康封せられ、安土の
城下に入りしかば、織田右大將信長は、いと鄭重に迎へんと、直に
惟任光秀に、饗應の役を命ぜらる、地御請いたせし光秀は、亂れたる
世に心得し、都の手振見せばやと、さしも目出度勤めしを、小人輩
の讒により、中干善美過分の評を受け、中干疑心暗鬼は信長の、胸に宿りし
時も時、中干羽柴秀吉中國より、中干援けの兵を請ひしかば、中干嚴命忽ち光秀

の、頭あたまの上にぞかゝりける、地光秀私みづかに思ふやう、人もあらむにこの
 我われに、羽柴はしばが命めいに従へとは、中干あな情なさけなわの我われが君きみやと、齒は嚙かみをなして
 恨うらみしは、地君きみに仕ふる人臣じんの、よもあるまじき事ことなれど、又信長またのぶながを
 見る時は、中干右大将みぎたいしやうとも仰あふがる、身みの、疎暴そぼりの振舞ふるまひいと多く、地或時あるときは
らんまる蘭丸らんまるをして、みつひで光秀みつひでの頭あたまに鐵扇てつせんを加へさせ、あるときまた或時あるときは好まぬ酒さけを殊
 更さらに、我意がいきを透とほしてすゝめしめ、志賀しがの都みやこの領地りやうちさへ、三年みよとせの中に
 は事ことなくも、奪うばひとられむ説せつを聞き、今又産いままたさんを傾かたむけて、新あらたに來りし

家康いえやすに、心盡こころづくしのもてなしも、中干琵琶湖びわこの水みづの泡あわと消え、押おさへし煽ほのほむ
 らくと、燃もゆる思おもひの光秀みつひでが、拳こぶしを握にぎりて立ち上たり、動はたらく眼まなこの間
 より、由ゆ々ゆしき大事だいじはの見みえしを、地露程つゆほどし知らぬ信長のぶながは、諸將しよしやうを安土あづち
 に留とどめ置き、自みづから近臣きんしん百餘人よにん、率ひき従したがへて京都きやうとなる、切り本能寺ほんのうじにぞ入
 りにける、大干時ときこそ來きたれと光秀みつひでは、地田鶴たづも遊あそばぬ龜山かめやまに、從じうし子し光春みつはる等
 を召めし寄よせて、中干積つみる恨うらみの數かず々ずを、數かずふる中うちに光秀みつひでが、大干眼まなこは血まなこ汐ちしほ逆さかり
 逆立さかだつ髪かみは冠かんむりを、突つく勢いきほひを見て取とりし、地光春みつはる共ともが百千度もうちたひ、中干諫いさむる言こと

葉も聞かばこそ、推して謀反に加盟させ、暴戻無道の殺逆を、企し

こそ淺ましけれ、斯くて士卒を打ち揃へ、中國勢を助けんと、偽り

向ふ大江山、心の駒も鳥羽玉の、暗路を急ぐばかりにて、さしも忠義

の光秀が、追々年も老の阪、如何なる道にや迷ひけむ、無念至極の

胸の中、亂れて濁る桂川、渡らむ駒の足並は、東さしてそ進みける

本能寺溝深幾尺 我成大事在二今夕一 四檐梅雨天如墨

老阪西去備中道

我敵正在本能寺一

爰に始めて軍勢は、漸く二心と悟りしが、時しも六月二日の朝まだ

露の身軽き軍兵が、本能寺をば取り圍み、関を作りてぞ攻め入

りける、此物音に信長は、寢覺の耳を聳つれば、紛ふ方なき人馬の

聲、館間近く聞ゆるに、枕を蹴つて立ち上り、疾く見届けよとあり

げれば、森蘭丸かしこまり、表の方に走り出で、見越の松に片手を

揚鞭東指天猶早

敵在二備中一汝能備

揚鞭東指天猶早 敵在二備中一汝能備

かけ、右手をかざして見てあれば、雲か霞か白旗に、染めたる桔梗
 の紋所、見るより蘭丸引き返し、光秀謀反と答ふるに、赧と怒りて
 信長は、者共覺悟と呼ばはりて、弓矢おつとり立ち向ひ、寄せ來る
 敵を物ともせず、瞬く間に數十騎を、矢繼早に射て落し、勢鋭く拒
 ぎしも、只だ一と筋と信長が、頼む弓弦ふツと切れ、得たりと突き
 入る豪敵を、透かさず弓もて打つて伏せ、兎角する中信長も、左手
 の腕に痛手を負ひ、蘭丸代つて拒ぐうち、宿直の者も悉く、命を的
 かにいないたでらんまるかはふせ

に戦へど、衆寡敵せず信長は、最早是迄とや思ひけむ、自ら館に火
 を放ち、煙の中に身を隠し、及に伏してぞ果てにける、嗚呼豪邁の
 信長が、空をも蓋はん大鵬の、圖南の翼中空に、燕雀の爲に惱され、
 終生の望み絶えたるは、獅子身中の蟲に倒れたる、譏を受けて皆人
 の、口に残るも悼ましき、續いて蘭丸を始めとし、坊丸力丸の小姓
 ども、未だ若木の櫻花、嵐の山の朝風に、いとも床しき香をとめて
 散るや散々後や前、百有餘人と諸共に、哀れ本能寺の朝の煙と消へ

にける。

研ぎ得たる心ゆるすな増鏡

思はぬ塵のかゝる世の中

つらく古今を案ずるに、人に君たる王侯の、心すべきは徳にこそ、

切り心すべきは徳にこそ。

櫻 狩

霞たなびく山々の、盛りの花を眺めむと、嘶く駒に鞍おかせ、東雲

の野に、燃ゆる草葉の露分けて、進む、駒の鬣に、亂れかゝれる青
近く淺茅生の、柴の庵をた一人、時放れし鶯の、聲を聞きつゝ春
柳の、絲を傳ふて朝風の、吹ともなしに床し香を、送りて我を誘ふ
かと、思ふばかりに遠近の、梢は雪か白雲か、景色妙なる其様に、
浮世の善悪も打ち忘れ、暫時木蔭に立ち寄りて、矢立の筆を取り敢
へず、

薄命能伸旬日壽

納言姓字冒此花

零丁借宿平忠度

吟詠恨風源義家

志賀浦荒飜暖雪

奈良都古簇香霞

南朝天子今何在

欲望芳山路更賒

と書きつゞけたる水莖を、跡に残して花の香を、盛りのまゝにとめ

くれば、茲は盛りを早や過ぎて、散りしく花は野に畑に、中干切り飛びかふ

蝶の如くなり、吟替嗚呼世中は鳥羽玉の、夢か現か昨日まで、榮へしも

のは今日は早や、見る影もなく成り果て、浮世の中と嘆ちつゝ、

今更夫れと夕告の、鐘の音さへ身に泌みて、昔を偲ぶ人もあらむ、

左は左りながら花の木も、又來む春にめぐり合ひ、貧しき人も何時

までか、時めくことのなからめや、榮枯盛衰は世の習ひ、只玉鋒の

道理を、中干切りたどらむ外はなかりけり、いざ歸らむと乗る駒の、手綱か

い繰る其袖に、花の吹雪はかゝりけり、切り花の吹雪は掛りけり。

城山

夫れ達人は大観す、切リ拔山蓋世の勇あるも、切リ榮枯は夢か幻か、切リ大隅山

の狩倉に、真如の月の影清く、無念無想を觀ずらむ、何を怒るかい

り猪の、俄に激する數千騎、勇みに勇む逸り雄の、騎虎の勢一徹に

留まり難きぞ是非もなし、唯身一つを打ち捨て、若殿輩に酬ひな

ん、崩れ、明治十年の秋の末、諸手の軍打ち破れ、討ちつ討たれつ馳て散

る、霜の紅葉の紅の、血潮に染めど願ぬ、薩摩武夫の雄叫びに、打

ち散る玉は板屋打つ、霰手走る如くにて、面を向けむ方ぞなき、木

だまに響く鬨の聲、百の雷一時に、落つるが如き有様を、隆盛打ち

見てほくそ笑み、あな勇ましの人々や、亥の年此の方養ひし、腕の

力も試し見て、心に残る事もなし、いざ諸共に塵の世を、脱れ出で

むは此時と、

孤軍奮闘衝圍還

我劍既摧吾馬斃

秋風埋骨故郷山

地 一言を名残にて、桐野村田を始めとし、宗徒の輩諸共に、煙と

消えし丈夫の、中干切り、心の中心こそ勇ましけれ、官軍之を望て見て、昨日は

一 百 里 程 壘 壁 間

秋 風 埋 骨 故 郷 山

地 一言を名残にて、桐野村田を始めとし、宗徒の輩諸共に、煙と

消えし丈夫の、中干切り、心の中心こそ勇ましけれ、官軍之を望て見て、昨日は

陸軍大將と仰がれ、吟替君の寵愛世の覚え、比なかりし英雄も、今日は
 敢なく岩崎の、山下露と消え果て、移つれば替る世の中の、無常
 を深く感じつ、無量の思ひ胸に満ち、唯悄然と隊伍を整へ、目と
 目を見合す計りなり、折しもあれや吹き下す、城山松の夕嵐、申干切岩間
 に掬ぶ谷川の、地無常の聲も何となく、悲鳴するかと聞きなされ、戎
 服の袖を、切絞らぬものはなかりけり。

小 敦 盛 (一段)

地祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅隻樹の花の色、盛者必

滅の理をあらはす、驕れる者は久しからず、貴き人も終りには、切遂

に亡ぶる習ひあり、大干此度源氏平家の戦に、申干平家方一族母衣大將

の其中に、もゝの哀れを止めしは、無官の太夫敦盛にて、諸事の哀

れを止めたり、地敦盛其の日の出で立ちは、何時に勝れて花やかに、

まづ肌よりは梅の匂ひの肌寄せに、唐紅を召されたり、練絹に色々

の糸を以て、秋の野の草盡しを縫ひたる直垂に、弓手の手づがひ雨

面の、脛當に萌黄緘しの鎧着て、鍬形打ちたる五枚兜の緒をしめ、
 鎌倉作りの御太刀を佩かせ、二十四さしたる染羽の征矢を負ひ、塗
 籠籐の弓を持ち、連錢葦毛なる駒に、梨地の蒔繪したる、白覆輪の
 鞍を置き、御身輕げに召されしは、中干切り、さも勇々しくぞ見えにける、御
 一門を始め、主上の御供召され、濱に下らせ給ひしが、敦盛御運の
 末のかなしさは、漢竹の抑調を内裏に忘れ、若上臈のかなしさは、
 捨て、御出であるならば、かほどの事もあるまじきに、此の笛を忘

れおくこと、敦盛が末代の耻辱と思し召し、取りに歸らせ給ひしが
 筒様々々に時刻を過す其中に、御一門の御座船も、兵船も皆遙の沖
 に押し出す、嗚呼痛はしや敦盛は、力なくして鹽屋の方を心掛け、
 駒に任せて落ちさせたまふ、中干切り、心の中こそ哀なれ、是は扱置き爰に又
 武藏の住人篠頭の旗頭、熊谷次郎直實は、地一の谷の先陣とは申せど
 も、未だ左程の功名も極めず、無念至極はなかりける、天晴爰によ
 き大將の通れかし、崩れ、駒押しならべ引つ組むで、功名せばやと思ふ折

節、敦盛を目にかけ、駒引き寄せ打ち乗り、鹽屋をさして急ぎ行く
 直實やがて大音あげ、夫れに落ちさせ給ふは、平家方にも天晴善
 き大將と見たてまつる、斯く申す某は、武藏の國の住人、篠黨の旗
 頭、熊谷次郎直實と申すなり、源氏方にも隠れなき敵に候、正な
 くも敵に後を見せたまふやな、引き返し御勝負候へ、見參せんと扇
 をあげて招かるゝ、痛はしや敦盛は、熊谷とは聞きながら、更に耳
 にも聞き入れねば、落つる味方の兵船に心がけ、駒を早めて急がるゝ

去る程に敦盛は、遙の沖を御覽するに、御座船間近く寄せければ、
 中干 悦びて腰より扇を取り出し、沖なる船を招かるゝ、船中の人々其中
 に、門脇殿は此由を御覽じて、伊賀の平内元國を御側に召され、如
 何に元國あれを見よ、母衣掛武者の只一騎、船を招くは左馬頭行盛
 か、又は無官の太夫敦盛か、孰れも見よとの御誕なり、悪七兵衛景
 清承はり、某見て參せんと、白柄の長刀おツとり杖につき、船梁
 につと立ち上り、兜を傾け磯邊の方を、つくづく折ち成り、嗚呼痛

はしの御事や、何とて御座船に後れ給ふかや、あれに落ちさせ給ふ

は参議經盛卿の御子息、無官の太夫敦盛卿にて渡らせ給ふ、御馬の

毛色、鎧の印に至るまで、少しも違ふところはましまさぬ、あゝ痛

はしやと申し上ぐれば、門脇殿聞し召し、敦盛ならば此の船を、磯

邊へ寄せよと御説なり、水主楫取畏まり、俄に櫓楫を立て直し、船

を磯邊に寄せんとすれど、しかも此程より吹き續きたる、北風の烈

いきに、名残の浪は今日も立つ、風は競ひて船は香車の如くなり、

白波世界をはぶき、真砂も天に揚りければ、宛然雲の山の如くなり

小船ならば自から、弓手馬手にも押し廻さるゝものなれど、殊に勝

れし大船に、大勢を召されたり、次第々々に出づれども、逆捲波に

せかれつゝ、磯邊に寄すべき様はなし、敦盛今は駒を游がせ、船に

乗らんと思召し、駒の手綱を掻い繰りて、海中にさつと駆け入り、

浮きつ沈みつ一段ばかりは進みしが、駒逸物とは申せども、逆捲く

波にせかれつゝ、泳ぎかねてを見えにける、熊谷此の由を見るより

も、如何に平家の御大将、御座船遙に程を隔てたり、然も浪風烈し
くして、よもや逃れさせ給ふまじ、引き返し勝負候へ、返し給はぬ
ならば、某が中指を射てまゐらせんと、弓と矢とを打ちつがひ、徐
に引いてかゝりける、敦盛駒を引き留め、爰を逃れ落ちんとせしに
斯く運の極まる上は、若しも源氏の鏑矢に射留められなば、平家末
代の耻辱と思し召し、いざ爰にて勝負を致さんと、相圖をなして、
駒の手綱を引き返し、海中より颯と駆け上り、染羽の鏑矢打ち違へ

斯くこそ詠じたまひける。

梓弓矢をさしわけて引く時は

返す心を知るかそも君

と遊ばし給ひければ、熊谷も日頃心得ある弓取なれば、あつと心に

應へ、左右の鐘を蹴張りして、頓て返歌に、

いたつきの早やはつれむと思ひしに

矢といふ聲に立ちぞとゞまる

と返歌をなして、切り心静かに待ちにける。

小 敦盛 (二段)

去る程に、やがて敦盛打物の鞆はづし、崩れ熊谷に打つてかゝる、直實
 しつかと受け留め、受けつ流しつ爰を先途と火花を散らし、二騎並
 びて面もふらず切り結ぶ、未だ勝負と見えざりしに、敦盛打ち物投
 げ捨て、いざ組まんと駆け寄るを、直實も共に打ち物投げ捨て、快
 く駆け寄つて、馬上ながらに無手と組み、互に交はす聲の中、一度

に鐘を踏み外し、あふみ兩馬が間に撞と落ち、上を下へと返しける、痛は
 しや敦盛は、心は矢猛に勇めども、あつもり鬼をも挫ぐ熊谷の、物の數とも
 思はねば、心安く取つて押へ、首を搔かんとしけれども、おも餘り手弱
 く思ひさし、俯きて御相恰を見奉つるに、おも薄化粧に鐵漿の有様は、
 殿上人の年の頃、十四五計りと打ち見へて、でんじやうひと誠に容顔うるはしく、
 餘りに痛はしさに、あま少し引き寛げまゐらせ、扱は中々平家方にては
 如何なる御公達にて渡らせたまふかな、いかに御名を名乗らせ給へとあり

ければ、敦盛は熊谷に組み敷かれ、世にも苦しき息をつき、扱は中

々武藏の國の熊谷は、文武二道と聞きつるに、何とて合戦に法なき

事を宜ふやな、我は天下の朝臣として、月卿雲客の列につらなり、

詩歌管絃の道には、長せし身なれども、此の三年の間は、一門の運の

盡き、いとあこがれ亡びしより、武士の勇める法を粗々承はるに、

夫れ武士の名を名乗るといふは、互に野陣に群りて、胡籙箠を腰に

つけ、打ち物抜き持ちて、我は何所の何某と、名乗りてこそ勝負は

致すなり、只今敵に組み敷かれ、其儘名乗るといふは、今こそ初め

て承はる、直實の言葉に、仰せはさることながら、御苗字をあらは

し首を取り、直實が譽をあらはさん爲め、敦盛聞し召され、夫れは

隠れもあるまじ、只某が首を取り、御邊の主人義經に見せ給へ、若

しも義經見知らずば、蒲の冠者に見せ給へ、蒲の冠者が見知らずば

此度平家方より生け捕りの者も多かるべし、彼の者共に引き向けて

誰が首とも分からずば、其時こそは名もなき者の首と思ひ、只草叢

に捨てたまへ、のう熊谷とありければ、直實うけたまはり、申干、扱は中
 武夫の勇める法を、大干悉しく知ろし召されしよな、地世に憂き者は我
 等にて候らへども、君に隨身御身を助けんとすれば、親と合戦子と
 争ひ、申干花の下なる半月の影、風の前なる一夜の燈、おや霽風朗月飛花落
 葉と聞く時は、あんそ此の度の合戦に熊谷が、はな廻り合ふ事も、はな前世の縁と思
 召し、地御苗字名乗らせ給へ、君の奉公其の忠に、め浮世を吊らひ申す
 べしとありければ、こめうし敦盛名は何時までも名乗るまじと思へども、あつもり後

世を吊らはん嬉しさに、申干我を誰とか思ふらん、われ我こそは、かつらばらしん葛原親王
 の後胤、こういん参議經盛が末子、さんぎつねもり無官は今の假名にて、むくわん太夫敦盛とは某な
 り、地今年歳は十六歳、こんねんとし軍は今日が始めなり、いくさけふさのみに物を尋ねたま
 ふな、は早や首とれや熊谷とありければ、くまがへ直實は涙を流し、なをさね扱は無官
 の方にて渡らせ給ふやな、かた御年は十六歳、わた某が一子小次郎直家も、おんとし
 今年歳は十六歳、こんねんとし扱は御同年にてましますよな、さい御存じの通り直家
 も、こ此の度一の谷に先駆いたし、たひ右手の腕に矢を射られ、め某に打ち

向ひ、中干此矢を抜きて給はれと申せしが、地如何にせん弓取が、敵と味

方の其中で、餘り心弱しと思ひ、中干如何に直家、若しも其の手が深手

なれば、駒より下りて自害せよ、薄手ならば敵と引ッ組んで討死い

たせ、地の篠黨の名を汚すなど、じツと睨みてありければ、其時某が方

を一と目見て、敵の陣所に駈け入るを、後姿を見しばかり、今二た

目とは見えざりけり、此直實がつれなき生命ながらへて、吟替武藏に歸

り直家が、討死と聞かば誠に母は歎くべし、吟替ままして經盛卿の御子息

今日まで花やかに染めたる若君を、磯邊に一人御殘し、さぞや歎か

せ給ふべし、哀れ貴きも賤しきも、子を思ふ道に迷ふとは、いまみ今身の

上に知られたり、我が小子次郎に思ひ替へ、地助けまゐらせ候と、云

ふより早く引き立て、はや鎧につきたる塵打ち拂ひ、駒引き寄せ打ち

乗せ奉り、直實も共に馬に打ち乗り、いとまごひ暇乞して四五町ばかりは見送

りしが、崩れ此の時後より味方の関の聲、たれ誰ならんと見返れば、ゆんで左手の

方には成田平山控へたり、ついで妻手の方には蒲殿佐々木、よめ四ツ目の紋の

今日まで花やかに染めたる若君を、磯邊に一人御殘し、さぞや歎か

せ給ふべし、哀れ貴きも賤しきも、子を思ふ道に迷ふとは、いまみ今身の

上に知られたり、我が小子次郎に思ひ替へ、地助けまゐらせ候と、云

ふより早く引き立て、はや鎧につきたる塵打ち拂ひ、駒引き寄せ打ち

乗せ奉り、直實も共に馬に打ち乗り、いとまごひ暇乞して四五町ばかりは見送

りしが、崩れ此の時後より味方の関の聲、たれ誰ならんと見返れば、ゆんで左手の

方には成田平山控へたり、ついで妻手の方には蒲殿佐々木、よめ四ツ目の紋の

方には成田平山控へたり、ついで妻手の方には蒲殿佐々木、よめ四ツ目の紋の

旗^{△△}を押^{△△}した^{△△}て、上^{△△}の山^{△△}には御大將九郎判官義經、白旗^{△△}を靡^{△△}かせ、膝^{△△}
 元^{△△}に取^{△△}つては武藏坊辨慶、相摸龜井片岡伊勢駿河、源氏^{△△}の一族^{△△}聲^{△△}々^{△△}
 に、武藏^{△△}の國^{△△}の熊谷^{△△}は、敵^{△△}を引^{△△}組^{△△}んで候^{△△}ひしが、す^{△△}で^{△△}に組^{△△}み敷^{△△}きな
 がら助^{△△}くるは、必^{△△}定^{△△}逆^{△△}臣^{△△}と覺^{△△}えたり、二^{△△}心^{△△}あらば直實^{△△}共^{△△}に打^{△△}ち取^{△△}れ
 と、聲^{△△}々^{△△}に呼^{△△}ばはれば、直實^{△△}も詮^{△△}方^{△△}なく、又^{△△}も扇^{△△}をあ^{△△}げて招^{△△}き寄^{△△}せ、
 如何^{△△}に若君^{△△}あれを御覽^{△△}候^{△△}へ、如何^{△△}にも助^{△△}けま^{△△}る^{△△}らせ度^{△△}は思^{△△}へども、
 中干^{△△}の軍勢^{△△}雲霞^{△△}の如^{△△}く充^{△△}ち満^{△△}ちたり、よもや逃^{△△}させ給^{△△}ふまじ、哀^{△△}れ

直實^{△△}が手^{△△}にかけ、後^{△△}の御供養^{△△}を營^{△△}み、後世^{△△}を吊^{△△}ひ申^{△△}すべしとありけ
 れば、敦盛^{△△}は涙^{△△}を流^{△△}し、中干^{△△}夫^{△△}れ士^{△△}は戦^{△△}場^{△△}にてはなき身^{△△}と思^{△△}へども、此^{△△}
 處^{△△}を逃^{△△}れ行^{△△}く先^{△△}にて、賤^{△△}しき者^{△△}の手^{△△}にかゝり、面^{△△}を曝^{△△}さんも、平家^{△△}
 未代^{△△}までの耻^{△△}辱^{△△}なり、簡^{△△}程^{△△}義理^{△△}ある武士^{△△}の手^{△△}に罹^{△△}り、死^{△△}する生命^{△△}は
 惜^{△△}しからぬ、早^{△△}や首^{△△}取^{△△}れや熊谷^{△△}と、西^{△△}に向^{△△}ひて手^{△△}を合^{△△}はせ、覺^{△△}悟^{△△}極^{△△}
 めておはします、流石^{△△}剛氣^{△△}の熊谷^{△△}も、何處^{△△}に太刀^{△△}をあ^{△△}つべしとも思^{△△}
 へず、心^{△△}も亂^{△△}れ氣^{△△}もたえて、途^{△△}方^{△△}に暮^{△△}れて居^{△△}たりしが、斯^{△△}くてはか

なふべからずと、大干又も馬上にむづと組み、りやうは兩馬が間に引き下し、おろ敦

盛が花の首を、地水もたまらず打ち落す、さしもに猛き直實も、しがい死骸

に暫時は抱きつき、はま濱に伏してぞ歎きたまふ、されど又櫓番所の前

なれば、やうくこころと漸々心を取り直し、おんし御死骸を引き立て見るに、よのひ鎧の引合せ

左手の方には卷物一卷さゝれたり、つまで妻手の方には漢竹の御笛扇を添

へてさゝれたり、か彼の卷物を披き見るに、へいけ平家累代の事悉く記し召

れたり、おんくやがて御死骸を葬り、おんふ御首笛卷物、漢竹の御笛扇を取り上

げ、こまひ駒引き寄せ打ち乗り大音あげ、大干平家方母衣大將の其中に、むくわん無官

の太夫敦盛を、たいふ武藏の國の住人篠黨の旗頭、はたがしら熊谷次郎直實打ち取つ

たりと、がいか凱歌を控とあげ、ちんしよ陣所をさして引て行く、地やがて敦盛の首

を、よしつね義經實見の其後は、なをさね直實は給はる、あつもり直實首を押し戴き、ゆみ弓の絃

ふつと切り、たち太刀は素より弓矢を捨て、もどりき髻切つて武士を捨て、よらひ鎧の

袖を墨に染め、しんくろ新黒谷に引きこもり、はふねん法然上人の弟子となり、そのな其名

も蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

り、れんしやう蓮生法師と様をかへ、み三歳が程は夜もすがら、ほけきやう法華經百萬遍を唱

へ、敦盛の追善を營みける、これも敦盛御最期の時に、一言の言葉
あつもり つひせん いとな
のかはしもある故に、中干切り武士の情もあるぞかし、地何と聞いて唱へても
憂きは世の中義理は熊谷、物の哀れを留めしは、無官の太夫敦盛に
う さかきり くまがへ もの あは こと
て、切り諸事の哀を留めたり。
しよじ あはれ こと

太田道灌

地頃は彌生の末の方、中干切り嘶く駒に鞍をかせ、地士卒引きつれ道灌は、中干切り狩野
ころ やよひ すま かな いな こと くら しそつひ たうくわん かりの
にこそは出てける、地勇む春駒鳴く雲雀、影は何處に遠近の、たつき
はる こと な かなり

も知らぬ原中に、士卒にはぐれ道灌は、一人さまよひ居たりけり、
はらなか しそつ たうくわん ひとり
折しも降り来る春雨に、心せかれて道灌は、駒の手綱を搔い繰りつ
を ふ く はる こと たうくわん こと たつな かく
中干一と鞭高く彼方なる、中干切り賤が家をさして進まる、中干訪ふは嵐か松風か
ひ むちたか かなた しつ や すい こと ちん こと ちん こと
誰待つ風に琴の音ぞ、中干通ふ調のゆかしさに、駒を止めさせ道灌は、
たれま かせ こと ね かな しらべ こと こと こと こと
門を叩きて簀一領、借らんとこそは乞ひにける、地何を語らむ佐保姫
もん たう みの りやう か こと こと こと こと こと こと こと
の、一枝の花に物言はせ、露も溢ふれむ山吹を、かしこくも捧げつ
し はな ものい つゆ あ やまぶき こと こと こと こと
よ、いとも羞ぢらふ其様は、道灌其意を悟り得ず、訝しながら山吹
は そのさま たうくわんそのい こと こと こと こと こと こと こと

を、切り翳して遂に歸りけり、

孤鞍衝雨叩こ茅茨あんな

少女爲贈花一枝せう

少女不言花不語せう

英雄心緒亂如絲えいゆう

城に歸りて道灌は、近侍を招き問はせしに、近侍の答へ申すやう、

その古歌の意をかりて、みのなきを花によそへて、答へしなりとて

一首の歌を詠じけり、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだになきぞかなしき

斯く云々と事の由、具に申し上げれば、道灌いと愧ぢらひて、

いざ是よりは山狩を、やめて詩歌をば學ばんと、終に詩歌に秀でた

り、されば人々心せよ、己れが業に鞭うちて、學びの道に勵なば、

如何なる業かならざらむ、勵めよ勉めよ國の爲め、勉めよ勵めよ國

の爲め。

日本海々戦

地 明治三十八の年、頃しも皐月の末つ方、濛氣も深きあかつきに、濟
 州島の沖遙か、敵艦今や寄せ來ぬと、物見の艦の信號に、
 を洩しつゝ、待ちに待つたる我軍は、天の與へと雀躍し、
 んで錨拔く、御國の安危この一舉、懸りて我等大丈夫の、
 ぞと奮ひ起つ、戰士の方の意氣高し、荒ぶ風浪何のその、
 する迄は、再び生きて歸らじと、勇氣凛々進む間に、正午も過て早

や半時、霞める沖の島の邊に、煤煙一つ又二つ、次第に見ゆる數十
 條、旗艦スワローを始めとし、ついで敵艦約四十、二列縦軍おこそ
 かに、浪を蹴立て、進み來つ、やがて撃ち出す砲聲は、
 じく、砲煙天に漲りて、白日爲に光なし、奮戦こゝに數時間、
 勇猛の奮撃に、今や亂るゝ敵の陣、或は沈み又は焼け、
 は傷きて、戦闘力も絶々に、遁れ兼ねてぞ見えにける、
 や日は落ちて、夜色凄愴機熟し、襲ふ水雷驅逐艦、敵陣近く肉迫し、

力の限追ひ撃てば、闇に紛れて亂れ散る、秋の木の葉の夫の如、東

雲近くなりぬれば、逃れ後れし敵艦四隻、砲門摧け舵折れて、哀れ

や擧ぐる降伏旗、勇武絶倫名も高き、敵師ロジエスト提督も、鬱陵

島の島蔭に、擒となりし淺ましき、苦辛惨憺幾月か、萬里の波濤を

凌ぎつゝ、極東遙に進み來し、彼の剛勇のバルヂクも、大和武夫に

敵し兼ね、目指す港を前に見て、沈みつ焼けつ奪はれつ、消えて哀

れや水の泡、山は青々水清き、秋津洲根に仇をなす、醜虜は如何に

消え果てむ。 地 切り 何どか敵せん大和魂、やがて東海浪すさぶ、底の藻屑と

松 囃

新玉の、年立ち歸る春の日に、君が齡は千歳經る、松囃として數なら

ぬ、我等如きも許されず、聞くも中々面白や、鼓は四海の波の音、

笛は龍王の吟ずる聲、名も高砂の尉と姥、是れぞ盡きせぬ妹春かや、

神の御前の鈴鹿山、悪魔を拂ふのみならず、弓矢の譽残されし、田

村麿の御威勢は、今が世までも標葉の、注連引き廻す井筒より、汲
 めど盡させぬ若水は、老を養ふ便かや、扱て其の次は春の花、都に
 聞ゆる、三條の小鍛冶宗近は、心正直にして、神慮にかなひし名劍
 を作り出して、今太平の世とて、古き詩にもあるぞかし、長生殿の
 裏は春秋に富み、不老門の前には日月遅しと申せし事も、皆其心を
 ぞ學ばれて、今此御代と夕告げの、取々なれや梓弓、矢猛心の一つ
 だに、又剛の者の交はりは、頼みある中の酒宴かな。

春日野

春日野の、下萌へ出づる若草の、歳の戸あけて秋津國、霞わたれる
 片岡に、月は残りて雉子鳴く、明けの友鶴君が代の、壽ぎ祝ふ初聲
 に、南山の、榮え久しき松竹の、落葉掻き取る諸人の、遊ぶ小川の
 菊の露、流れも匂ふ五百年の、齡を國にゆづる葉の、朝日輝く富士
 の峰、是れぞ蓬萊山とは謠ひつゝ、七方の峰は影を湖水に浸し、木
 々の梢も荒磯の、月海上に浮びては、兎も走る浪の上、緑樹陰沈み

ては、魚木にのぼる風情かな、五風十雨の御代の春、四海に靡く時
津風、君が治むる御代なれば、幾萬代までも變らぬ、御代こそ目出
たけれ。

國 船

雲に聳へし高山も、登らばなとか越えざらむ、空を浸せる海原も、
渡らば終に渡るべし、我が蜻蛉洲は茜さす、東の海の離れ島、例へ
ば海の中、中に、浮べる船にさも似たり、二萬方里の船の中、四千

餘萬の乗組あり、船の主の指揮を受け、文明海に進み行く、水主揖
取の多かるに、我等も揖子の一人なり、船の行手は和田の原、八重
の汐路の遠ければ、颶風逆まく時もあり、高浪荒るゝ時もあり、船
手の業に習はずば、颶風高浪しのぎ得て、思ふ港にいかで着くべき。

小 督

頃しも秋の半の空、詠め勝ちなる御袖の、涙の露を拂らはせたまひ、
宿直に侍らふ彈正大弼仲國を召され、如何に仲國、小督の行衛を知

りたるか、大千内裏を逃れ出でしより、中千嵯峨野の邊にいさゝやかの、知
 邊に頼りてありと聞く、なんぢいかに汝如何にもして尋ね出し、このふみつた此文傳へよとの
 仰せなり、地仲國つくぐ思ふ様、さか嵯峨のわたりとばりにて、あるじ主の名
 をだに知らずして、たづ尋ねん様はなけれども、こがう小督の殿は、よ世にも知
 られたる、こと琴の上手におはすれば、中千今宵最中の月影に、さみ君の御上思
 い出で、さよく一曲をだに調べ給はぬ事はよもあらし、地兎にも角にも尋ね
 出でまゐらせて、いりりよ叡慮を休め奉つらんと、こころ心に思ひ定めつゝ、かし

こまりぬと聞え上げ、きこやがて御前を罷り出で、れう寮の御馬に打ち乗り
 て、中千隈なき月に鞭をあげ、こせん小鹿鳴くこの山里と詠じけん、さか嵯峨野の
 奥に別け入れば、おくきらめき渡る白露に、やまざこ尾花が袖も打ち混り、さか鳴き
 かはしたる虫の音に、むし浮世の善悪も思はれて、さか獨り心を痛めつゝ、
地家あることに立ち寄りて、中千問へども知る者更になし、地如何がはせん
 と駒を立て、こま茫然としてありつるが、ほら若し寶林院にて在するやと、
かめやまちが龜山近く至りしに、中千しづけき遙に聞えたり、地峰の嵐か松風か、たづ尋ぬ

る人の琴の音か、とめつゝ行けば一と叢の、松の陰なる片折戸、内に聞きつる爪音を、手綱ゆるるべてつくぐくと、聞けば誠や月花の、御遊の宴に侍りて、笛の役つかまつりし時、聞覺へつる調にて、申干更曲は想夫戀、地扱は紛れもあらじとて、腰より横笛抜き出だし、すこし許り吹きならし、やがて駒より飛び下りて、門をほとく打ち叩き、中干是は内裡より仲國、御使にまゐりたり、地明けさせ給へと訪ふに、琴ひきさし静まりて、かへつて音もなし、やゝありていたひし

げなる女房、門を細目に開け、顔ばかり差し出して、怪しの賤が伏せ庵に、内裏より御使など給はるべきにあらず、門違ひにや侍らんと云ふに、なかくに仲國なまじいに答しては、門とざれんと思ひければ、是非なく押しあけて中に入り、妻戸の椽に進み寄り、中干何とて斯かる處に御渡り候ふぞ、君には旦暮思ひに沈ませ給ひ、地つやく供御も聞き召さず、打ち解け御寝もならせ給はず、ほとく御命も、御覺束なふこそ見え給へり、斯く申さば、上の空にや思さんと、御消息

をば参らすれば、吟替あらなつかしやと、御文顔にあてたまひ、おんふみかほ暫し言

葉も泪あめ、晴れたる月も曇るらむ、なかくに仲國も、そゝろにせき來る涙

をさへ、おもて兎角慰めまゐらせつゝ、表の衣絞るばかりになりけり、

地やゝありて、御返り事引き結び、女房の装束一と重、給はりければ

肩にかけ、君にもさこそ待ち侘びておはすらめ、重ねて御迎へにま

ゐるべし、待たせ給へと云ひ捨て、中干切り駒を早めて立ち歸り、地ありし

次第を残りなく、奏する程にほのぐと、秋の夜長も明けにけり、

秋切の夜長も明けにけり。
あきよながあ

送別

地茜さす我が日の本に人といふ、人の中より撰まれて、海原遠く浦々

の、浪の花咲く異國に、渡り行くなる君が名と、中干切り譽は世々に残るら

む、大干茲に船出を祝はんと、地心をこめて足引の、山にて狩り得海に釣

り、川に漁り野に求め、猶あきたらで鳳を裂き、鱗を屠りて盃を、勸

むる中にかたへより、ぎん吟ずる聲の高らかに、

送別

地茜さす我が日の本に人といふ、人の中より撰まれて、海原遠く浦々

の、浪の花咲く異國に、渡り行くなる君が名と、中干切り譽は世々に残るら

む、大干茲に船出を祝はんと、地心をこめて足引の、山にて狩り得海に釣

り、川に漁り野に求め、猶あきたらで鳳を裂き、鱗を屠りて盃を、勸

むる中にかたへより、ぎん吟ずる聲の高らかに、

渭城長雨濕輕塵

客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒

西出陽關無故人

古き調の唐詩に、思をよせて別れをば、惜しむ心もなつかしく、皆

とりぐに又酒を、勸めて興をぞ添へにける、暫くありて一同に、

盃さ上げ起立して、君萬歳を唱へけり、君萬歳を唱へけり。

月下の陣

宵の篝火影失せて、木枯吹くや霜白く、夜は更け沈む廣野原、駒も

蹄をくつろげず、音なく冴ゆる秋の月、草葉の露は玉を縫ひ、夜果

敢なき秋風も、止みて何時しか虫の音の、何を謠ふか草叢に、楯を

擗の武夫は、明日とも知で草枕、夢は何處を廻るらむ、茲に今宵の

宿り木の、身はまだ解ぬ鎧下、上行く雁に夢破れ、そいろに思ふ故

郷の、雲井遙にかゝる月、國を思ふの誠心に、家をも如何で忘るべ

き、只身一つを亡き數に、入る西山の月影を、水に結びて明日は又

駒の手綱を搔い取りて、敵營さして幕進、花々しくも戦はん、夜は

ほのくくと明け渡り、星も隠れて横雲は、茜に染めて朝ぼらけ、
く駒の勇ましく。
断

迷語もどき

地 世の中は、迷ふが故に三界は暗し、一心悟れば、十方世界は廣くし
て、地獄の餓鬼も我にあり、彌陀も浄土も他にあらず、佛とは、何
を岩間の苔衣、唯其のまゝの姿にて、慈悲より外にしく心なし、唯
世の中は、腹は立ちても言葉は殘せ、言葉少くすなほにして、濁る

心を澄やかに持ち、何れ人には情あれ、情は人の爲めならず、廻り
廻りて小車の、後は我身の爲めとなる、左れば古人の言葉にも、聖
人は人を誹らず、仁者には敵なし、大海は塵を擇ばず、枝高きとて
風に脆きは、あだ折れぞする、悪まるゝ人には、猶能くしなへよ、
後には深き友となる、身地の善悪は、人の上にて我身を磨け、友は鏡
となるものぞかし、我が善きに、人の悪きはなきものよ、唯何事も
善悪と、思ふ心を捨て、見よ、何所の里にも住みよかるべし、我智

我心、我力我慢を捨て、見よ、頼む心は空蟬の、藻抜け果てたる身
こそ安けれ。

和強

地 和光同塵の神の道、あまねく闇を照せども、弱肉強食の世の中は、
中干切り、猶争ひの絶間なし、こゝに國を立つるもの、軍備怠ることなかれ、
敷島の、大和の國は昔より、人強うして義に堅し、昇る朝日の高千
穂の、峰よりつゞく大和路や、其東征の旗風の、新羅に渡る御稜威

靡き従ふ高鹿百濟、三韓長く藩屏の、御代を傳へて二千年、刀夷の
賊の騒ぎにも、蒙古の寇の荒びにも、動かぬ國の礎は、寄せて碎く
る白浪の、我より起る胡蝶陣、高麗大明を動して、其國震ひ怖れけ
り、絶海船を連ねては、豊太閤の大雄圖、彼の社稷も是よりぞ、傾
く運の末終に、果敢なく消ゆる春の夢、秋の風にも合はずして、我
は榮ゆる大日本、時に浦賀の海騒ぎ、馬關鹿兒島時の間に、砲火の
巷となりしかど、暫時が程に風なぎて、毒藥變じて良薬と、なりて

は敵と手を握り、攘夷の國是闔國と、なりぬる運の月と日を、中干かけ
 替へられし王政は、こゝに維新と鳴る神の、天じもの、地清國命に違
 ふ時、撃てば砕くる威海衛、露國我に仇する日、攻むれば落つる旅
 順口、陸の勝利は奉天府、海の勝利は日本海、中干振古未曾の大捷は、
 人のかか神業か、地和國強大の四文字は、中干夫の暗示と知られけり、和和
 強の二字は幾干の、切神の心やこもるらん。

石 童 丸

地月に村雲花に風、心のまゝにならぬこそ、切浮世にすめる習ひなれ、
 茲に筑前筑後肥前肥後、大隅薩摩の守護職に、か加藤重氏其人は、無
 常を感じ世をすて、諸諸國修行に出給ふ、大跡に残りし妻や子は、思思
 ひ待こと十餘年、地父上高野に在りと聞き、石石童丸は母上と、菅菅の小
 笠を傾けて、旅旅の勞れも厭ひなく、漸漸く高野の禿宿、やどり給ひて

二人とも、あすは逢はんと悦ぶも、女人禁制の山なれば、せんかた

なくも母上を、麓にのこし参らせて、石童丸は只獨り、心細道分け

ながら、峰、薬師や瀧不動、手を合せつゝ伏し拜み、さびしさいは

むかたなくも、其夜は其處に假寝して、笠の屏風に腕枕、諸行無常

と告渡る、鐘の音いと身にしみて、九百九十の寺々や、峰谷々の

阿彌陀佛、菩薩を念じ尋ねれど、父ぞと思ふ人はなく、三日二夜は

早過ぬ、ふもとの母を案ずれば、後に引るゝ心地して、松吹風の音

までも、母の聲かとうたがはれ、

ほろ／＼と鳴く山鳥の聲きけば

父かと思ふ母かと思ふ

と行基菩薩のよまれたる、歌の心も思はれて、歩むともなくあゆみ

つゝ、無明の橋を越れば、左に花を右に數珠、光明眞言唱へつゝ

荻萱道心下り坂、見上げ見下す顔と顔、石童丸の振袖と、高祖の袖

ともつれあひ、はなれがたなく見えけるは、深き縁のあるならん、

其時袖に縋り付き、あな御僧よ御山の、今道心を此われに、教へて

給へと請ふさまの、地哀れに見ゆる幼子が、腰にさしたる脇差は、見

覚えのある品のみか、花の顔月のまゆ、何處が母に似てあれば、い

かにも不思議に堪へねども、じつと耐忍ていへるやう、尋ぬる人の

名を書きて、札場に建つれば逢ふことも、あらんと聞きし石童が、

途方にくれし形勢を、中千切哀と思ひ手をとりにて、おのが住家に連れ歸り

中千國は何處で名は何と、問はせ給へば石童は、せきくる涙押と、いめ、

國は筑紫の松浦潟、加藤左衛門重氏か、わすれ形見の石童と、地聞く

より荻萱胸せまり、かるかやむね落る涙をとめ得ず、石童それと悟りけん、若

し父上にましますば、ちいさ明かしてたべと前に寄り、まへ後ろに回り荻萱の

顔かんはせ覗のぞき懇ねんごうに、請こはるゝ時ときの石童いしどうを、嗚呼あゝ可懷なつかしの我子わがこよと、いふて

抱だきよせ名な乗のらんと、思おもひ給たまへど名なのりかね、其その苺かるかや萱こぞは去年あこの秋あき、

空むんしく敷のたまなりぬと宣いしどうへば、石童いしどうわつと泣なみ伏ふして、生いる人ひととも見みえざるを、

苺かるかや萱なぐさち々に慰なぐさめて、墓はかば場に連つれゆ行き指ゆびをさし、これこそ父ちちの墓はかなれと

教おしへ給たまへば石童いしどうは、力ちからなくく跪ひざまづき、涙なみだにぬれし袖たてたもと袂しほ、絞おりもあへ

ず香かうを焚たき、雪ゆきより白しろき手てを合あせ、南無阿彌陀佛なむあみだぶつと伏おし拜おがむ、姿すがたを

見みつる苺かるかや萱なぐさは、胸むねも張はり裂さくばかりなり、十じゅう年ねんに餘あまる修しゆぎやう行ぎやうにて、生せい

者しやひつり必滅會者定離しやちやうり、本ほん來らい空くうの理りを、悟さとりながらも恩愛おんあいの、情じやうには脆もろき

ものなるか、墓はかば場に倒たふれし石童いしどうを、抱いだき起おこして懇ねんごうに、涙なみだは佛ほとけの爲ためな

らず、ひとたび下くだりて母上はうへに、此この事こといふて回向まがせよ、諭さとされければ

石童いしどうは、泣なみ々山やまを下くだりつゝ、母ははに告つげむと來きて見みれば、哀あはれなるか

母上はうへは、石童丸いしどうまるを待まちち兼かねて、麓ふもとの野邊のべに枯かれ残のこる、草葉くさばの露つゆと消きえ

給ふ、たま吟替、あ嗚呼父上に生き別れ、また又母上に死別れ、ち天にも地にも只ひと

り、たよ便りとするは姉ばかり、あ逢ふて此事語らんと、かへ歸りて見れば姉

もまた、このよ此世を去りて影もなし、地さてもつれなき浮世哉、ふけり更行く夜

半に霜^一冴て、はん磯山松は音もなく、いそやま千鳥繁鳴松浦瀉、なみ浪に漂ふ捨小舟

引人もなき石童は、いしどう高野にありし其時に、あはれ憐み給ひし御僧より、ほか外

に便るはなしと知り、ふたりのほ再び登り荊萱の、いはりたづ庵尋ねて御弟子にと、こ請は

れて荊萱是非もなく、かるかやせ打連立て國々を、うちつれだち修業なしつゝ信濃なる、しなの國

に住所を定めさせ、ちうしよ子弟と名乗ばかりにて、おやこ親子地藏と稱へよと、

中干切り、ゆひごん遺言し給ふ哀れさよ、地信濃に名高き善光寺、いしどう石童寺の本尊に、おやこ親子

地藏の在すなり、おやこ親子の縁は斯迄に、かきま断つても断れぬものなるぞ、

今は昔の物語り、いま南無や大悲の地藏尊、なむ南無や大悲の地藏尊。

廣瀨中佐

七度地も生き返りつゝ、夷をぞ攘はん心、我忘れめや、最後の歌を小
 塚原、空しく忠義の鬼となりし、松蔭神靈の今此處に、切り又もあれま
 す軍神、大干勇める時は如月の、地空さりげなく春の雪、降る宣戦の大詔、
 征露の事の起りしより、武士のとり傳へたる梓弓、射るか彌生の花
 と散り、霞と消えし大丈夫の、多きが中に朝日子の、廣瀨中佐の討

死は、傳へ聞くだに涙なり、頃中干は三月二十七日、港口閉鎖の任務を
 帯び、地福井丸に打ち乗りて、向ふは何處旅順口、百の矢叫び雷の、
 玉の霞と降る中を、怯めず臆せず決死隊、

玉の緒の絶ゆるもやまじ敷島の

大和をのこのつとめつくまで

と詠みたる歌はまのあたり、捨る此身の屍を、飾る錦と覺悟して、

こゝろざしたる港口に、大干我と我が船打ち沈め、地任務は終へぬいざ去

らば、ボートおろせの命令に、兵士ひとしく乗り移る、中佐も乗ら

としたりしが、見れば一人不足なり、中干兵士一人の玉の緒も、國の寶

と豫てより、部下をいたはる仁愛の、情の聲をふり絞り、吟替杉野兵曹

長はあらざるか、呼べども答へはなかりけり、すきの杉野兵曹長はあらざ

るか、再び呼べと答なし、すきの杉野兵曹長はあらざるか、呼ぶ事三度に

及べども、答ふるものは荒浪の、早もテツキを隠すまで、地船は次第

に沈み行く、是迄なりと飛び移る、刹那に敵弾飛び來り、大干中佐の頭

上に破裂して、地嗚呼廣瀬武夫六尺の軀、僅一片の肉塊を、中佐残して落

花微塵となりけり、落花微塵となりける、

一世義烈赤穂里 三代忠義楠氏門

憂憤投身薩摩灘 慷慨就刑小塚原

君が作りし唐詩の、正氣の歌の一節は、古人に耻ぢぬ赤誠を、^{切り}其儘
 こゝに軍神、^地花は櫻木武士の、後の鑑となる神の、音も轟に残るら
 ん、^{切り}音もとゞろに^{のこ}残るらむ。

常陸丸

^地征露の軍やうくに、^す進みくつて南山の、^{けんそ}峻岨も已に打ち破り、^{おと}音
 に聞えし要害の、^{りよしゆんこう}旅順口も閉されて、^{わし}鷺の棲むてふ満州も、^{きみ}君が御

稜威の旗風に、^{切り}今は靡かぬ草もなし、^{中干}心筑紫の島離れ、^{大干}玄海灘のた
 中に、^地吹く沙風に日の丸の、^{中干}旗翻す常陸丸、^地佐渡も續いて進み行
 く船路の果は遠からむ、^な何を荒ぶる荒汐の、^{あらしは}逆捲く中の黒煙、^{崩れ}只一
 と筋に走り来て、^{われ}我を取り捲く敵の艦、^{なにごと}こは何事と云ふ間もなく、
 亂射亂撃雨霰、^{らんしゅうらんげさあめあられ}進み逃れんひまもなし、^{のり}千里を走る猛獸も、^{みづ}水に入
 りては如何にせん、^{ぼんり}萬里を翔る大鵬も、^{なみ}浪には翼折れぬべし、^{こゝろ}心は

かり逸れども、運送船の悲しさは、進退こゝに谷まりて、詮方なく

も敵艦に、任せ果てしそ是非もなし、佐渡は如何にと眺むれば、霧

に隔たり分かねども、同じやうなる運の末、輸送指揮官須知中佐、

是れ迄なりと思ひけむ、大久保少尉の捧げたる、聯隊旗をば手に

受けて、都の方をば伏し拜み、火を放ちてぞ焼きたれば、各將校も

取々に、貴重品の焼捨てぬ、この有様を打ち見つゝ、中佐は軍

刀抜き放ち、無念の泪はらくと、落つるを袖に打ち拂ひ、萬歳唱

へて悠々と、腹かき切つてぞ失せにける、列る將校始めとし、下士

兵卒に至るまで、同じ枕に伏すもあり、海投じて死するもあり、敵

彈ますく加はれば、甲板上はたちまちに、屍の山を築きつゝ、流

る血汐に玄海の、波は朱にぞ染みにける、哀れ果敢なや常盤丸、君

萬歳の聲細く、我か忠勇の將士等が、無念の涙打ち乗せて、潮の泡

と消えにしは、明治三十めいしちみそまり七年の、水無月中旬の暮みなつきなかはつ方、夕日くれは

波なみに落ちざれど、霧きりたち覆おほふ海原うなほらは、黑白あやめも分わかぬばかりなり、實

に誠忠せいちゆうの兵士ますらをが、十年とせの間朝夕あひだてうせきに、磨みがき鍊きたへし日本刀ほんたう、試ためさん敵てきを

前まへに見みて、遺恨ゐこんの刃やいばひ一いちと太刀たちも、報むくひん時ときもなくばかり、駒こまの蹄ひづめに

満州まんしゆうを、踏ふみにちらんも夢ゆめなれや、ウラルバイカル打うち越こえむ、あ

らまし事ことも幻まぼろしか、思おもへば無念むねんの極きはみなり、嗚呼あゝ一聯隊いれんたいの我勇士わがゆうし、水

漬つく屍かばねと消えしかど、國くにに殉しゆんせし大丈夫ますらをが、清まよき其名そのなは萬代よろづよも、響ひびき

の洋なたに立たつ浪なみの、絶たゆる時ときなく仰あふがれむ、末すえまで遠とほく流ながるらむ。

兒こ島しま高たか徳のり

元弘げんこう二年如月ねんさきさらぎの、小雨こさめしとく笠置山かさぎやま、黑白あやめも分わかぬ夜よの風かぜに、さ

して行く手ては楠くすのきの、蔭かげだに見みえぬ常闇とこやみに、荒あれわたりたり人面じんめんの、

心こころは鬼おにか蛇じゃの如ごとき、妖怪えうかい變化わいへんの賊そくど共どもは、恐おそれ多おほくも天皇てんかうの、御輿みこしを

元弘二年如月の、小雨しとく笠置山、黑白も分かぬ夜の風に、さ

して行く手は楠の、蔭だに見えぬ常闇に、荒れわたりたり人面の、

心は鬼か蛇の如き、妖怪變化の賊共は、恐れ多くも天皇の、御輿を

西の隱岐國、浪路遙に移しけり、其有様は今も尙、史上に見るだに

身の毛豎ち、腸さへも寸断々々に、絶へ入る許りうるむ目に、古怨

む外ぞなし、其時兒鳥高德は、衆を集めて云へる様、仁を爲す爲め

身を殺し、義を見てなすは勇なりと、勵す言葉勵む武士、其々向ふ

船阪の、山の險阻は是れやこれ、天の與へし要害と、身を潜めつゝ

堅睡吞み、我が大君を奪ひ奉らんと、待つに甲斐なき鳳輦は、早や

山陰に向ひぬと、聞くより早く杉阪の、樹の根岩角踏み碎き、望め

ば又も鳳輦は、遙に過ぎて、後影、僅に拜むばかりなり、今ぞ挫けし

兵士の、跡見送りて高德は、天を睨むで地に哭し、姿を變へて身を

窶し、雨の晨も風の夜も、厭はず御跡慕ひつゝ、善き折ならば赤心

を我が天皇に聞え上げ、叡慮を休め奉らんと、氣の張る弓は撓まね

ども、守りきびしき板廂、隙さへ漏らさぬ御姿に、差足拔足日本刀、

櫻の老木かき削り、矢立の墨の黒々と、赤き心を書き下し、

天 莫 空 勾 踐

時 非 無 范 蠡

十字の文字は長城の、堅き固めや勤王の、記すも賊は文盲、群り見

るも明鴉、房阿々と笑ふのみ、我大君は、龍顔いとも麗はしく、

暫しの間、愁の御眉、開かせ給ふも有難や、斯くの如くに高德が、

虎の穴だも恐れなく、虎の子得んと思ひてし、勳は後の代々までも、

輝きわたりて曇りなき、明治の御代に愛國の、古きを尋ね新しく、

護りの神とぞ崇めらる、され代の人心せよ、彼も人なり吾も人、食

ふは今も古も、日本に實る瑞穂なり、飲むは今も古も、清き日本の

辨 内 侍

國の水、卑屈の腸洗ひ去り、國を枕に誠忠の、樂しき夢や結ぶべし。

哀れや落花情あるを、流水などか情なけむ、況んや中も芳野川、離

れて世に棲む妹山や、春山の嶺の月としも、暫時いざよふ程もなく、

あかぬ別の村時雨、曇りやすきぞ是非もなき、爰に河内守左衛門尉

楠正行は、天下の安危を身一つに、思ひあつめて三芳野や、芳野の

宮に召され行く、頃は正平二年、師走の末の冬の空、嵐にきはふ木
 の葉にも、霞たばしる玉笹の、消えを争ふ一族郎黨、引き具して急
 ぎ來つる石川や、何騒ぐらん群千鳥、鳴音亂る、彼方より、俄に響
 く人馬の矢叫び、敵か味方か伏勢か、風に嘶く駒とめて、山下道を
 見渡せば、電光石火切り結ぶ、落花狼籍泣き叫ぶ、乙女の聲の玉ぎ
 るは、必定曲者出でたりな、いでや弱さを扶けやり、強きを挫きく
 れんづと、馬上の正行眞ツ先に、刃をかざして切つて入る、前より

切りつ後より、突き貫きつ無二無三、當るを拂ひ逃るを追ひ、縦横
 無盡に雉ぎ立てし、御手電飛雷の早業の、其勢はさながらに、阿修羅
 王の荒れたるが如く、獸王獅子の狂へるに左も似たり、野分の中の
 女郎花、思はぬ人に救はれて、思ふ人とはなりにける、其正行に守
 護されて、吉野の宮に歸り行く、辨の内侍の綾の袖、濡るは露か露
 ならず、悲喜こもぐの涙なり、侍臣帝に奏すらく、逆賊高師直豫
 ていも、思ひをかけし辨内侍を、奪ひ取らんと企て、巳に石川の邊

にて、軍卒數多取り圍み、虎口危く見えけるを、ゆくりなくも正行
 が危難を救ひまゐらせて、事なく歸館召されけり、傳奏斯くと聞し
 召し、帝は御簾を掲げさせ、汝正行なかりせば、いとも口惜しから
 ましを、よくこそ助け計らひつれとて、内侍を正行に賜んと、詔し
 て下されぬ、何思ひけん正行は、綸言いとも畏みて、

とても世に長らふべくもあらぬ身の

かりの契を如何で結ばむ

中千切り、と奏してこそは辭しにける、あゝあぢきな世の中や、身は是れ右
 少辨俊基が、忘れ形見の姫小松、花の匂はなけれども、操の色は深
 緑、結び給ひし妹と春の、縁の糸の長かれと、祈りし甲斐も水の泡、
 消えなば消えねの心かや、時雨につらき松さへも、清き雪には色變
 る、習あるに君はそも、たゞ假初の契よと、言ひ捨てまし、御心の、
 其處には深き故あらん、問はぬは辛し問ふは又、いとゞ耻かしとや
 しなん、斯くやと許りにとつむいつ、辨内侍は心から、戀路の闇に

に踏み迷ひ、今一度の逢瀬をと、中十後を慕ひて行き見しに、こはそも
 如何に、正行を始め百四十三人の郎黨は、かゝれとてしもなでざり
 し、其黒髪を切り捨て、地如意輪堂に奉納し、扱正行が矢尻もて、
 堂の扉に留めたりし、辭世の痕を讀み見れば、
 歸らじとかねて思へば梓弓
 無き數に入る名をぞ留むる
 偕は我夫正行君、斯かる覺悟のまし〜て、假の契を結ばじと、諭

しまし〜か夫としも、淺澤水のいと淺き、女心の悟り兼ね、つれな
 き君と葛の葉の、中干恨みしことの耻かしや、中干此の山寺の法の風、今の
 迷を吹きかへて、死なば未來は彼の國の、一つ蓮の花の上、地各留半
 座乘華臺、待我闋沈同行人、短き假の契をば、長き誠の契りとも、
 結びかへたる嬉しさよ、帝の御爲め君の爲め、我が身も斯くや返し
 せん、

大君に仕へまつるも今日よりは
 おほきみ つか けふ

心に染むる黒染の袖
 誠しあらば心なき、中干切り空行く雲もたゞよはん、地況んや正行木石にあら
 ず、いま今や決死の出陣に、ちぎ契らぬ妻の真心を、み身につまされて流石に
 も、だんちやう断腸の思やるせなく、中干不愼の者よ健氣なる、地我妻なれとそゞろ
 にも、よろひ鎧の袖を濡らしけり、切り鎧の袖を濡らしけり。

狂女
 人間の世の有様を、心に留めて案ずるに、一度は榮え一度は、又衰

ふる事もある、水も流れて水上に、中干切り又歸らぬが如くなり、大干祇園精舎
 の鐘の聲、かね諸行無常をあらはして、ひく飛花落葉はまのあたり、地只徒に
 過ぐる身は、ゆめ夢の中なる夢なれや、そのいにしへ其古は我ながら、びじん美人の姿人に
 も勝れ、よちやう餘寵の花と飾られて、いま今を盛りの花かつら、かけま掛巻くも畏け
 なくも、わ我が君の、おんみ御身近くに仕はれて、中干月見花見の御遊の供、かたじ錦
 の褥玉の簾、ひとねたま明暮なせし身なれども、ひと人と盛り花一時、地移つれ
 ば替る身の憂さを、そのちやうあ其寵愛も枯々に、いませうする今憔悴と衰へて、たいなに唯何事も妹

春の契り、淺衣の、薄き縁となり果て、中千切り哀れ果敢なき我身かな、

地 人生婦人の身となるなかれ、五十年過ぐるは夢の中、ゆめ僅に百年の其

中も、樂も苦みを他人によると、唐の白樂天が書きたる詩も、切り今身

の上うへに知られけり、地哀れ只、吟聲柴の折戸に人なくて、ひと獨り涙に伏し沈

む、かしく耿々たる殘んの燈火、かすか幽にして壁に添ひ、せうく蕭々たる夜の雨の、

窓を打つなる其音も、そのおと恨を添ふる媒となる、うらみ恨の數の重りて、地唐土

よまでの思ひ草、おも哀れ貴きも賤きも、いやし物思ふ身は異らず、りつするおな流水同じ水

なれど、中千切り淵瀬と變る如くなり、地唯人間の、因果を廻る小車の、我が

悪業に引かれ來て、切り斯かる浮身をや焦すらん。

那須野與市

地 四國屋島の、荒磯の濱で、源氏平家の戦に、源氏方の弓矢の響、切り今

の世までも記さるゝ、大干左もあれば、平家方より、沖なる船に扇を的

に立てけるが、中干兎にも角にも彼の的、射らではかなふまじと宣、へ

ど、地沖に立ちたる的なれば、誰こそ御請致す者もなし、大干爰に下野國

おま

の住人、那須野與市宗高は、青年茲に十九歳、其頃名を得たる弓取
なれば、心安く進み出で、御請いたし、御前遙に引き下る、されば

宗高其日の出立は、何時に勝れて花かに、緋絨の鎧着て、白檀磨き

の脛當に、兵庫鎖の小手を貫き、五枚甲の緒を占め、小金造りの太

刀を佩ぎ、年は五歳の眞黒名馬、梨地の鞍に錦繡の鏡、轡明鎮紫

手綱、重藤の弓に切斑の矢を持ちて、波打際に駆け出で、沖なる

的を見渡せば、間十二町ばかりと打ち見えて、名残の浪は音高く、

風を競ひて的定まらず、誠まことに射るに射られぬ次第なり、されど又武

士の、一度御請致せし上からは、兎にも角にも彼の的、射らではか

なふまじと、小松原へぞ駆け上り、駒より飛び下り兜を脱ぎ、那須

王八幡伏し拜み、宗高祈願申すやう、若も某七十五までの生命なら

ば六十五まで、六十五までの生命ならば五十五迄、五十五迄の生命

ならば四十二して身命を縮め、何卒彼の的射らせ給へかしと、深く

祈願を申しつゝ、やがて那須王八幡聞召し、宗高が、二つ共なき露

の生命に引き返へて、祈る心の不憫とて、十二歩を的一と筋、に打
 ち守らせて有り難や、宗高直に駒引寄せ、打ち乗りて小松原を駆け
 下り、駒の手綱を搔繰て、海中に颯と駆け入り、浮きつ沈みつ一段
 ばかりは出でたりしが、駒逸物とは申せども、逆巻く浪にせかれつ
 ゝ、泳ぎ兼ねてぞ見えにける、斯くては叶ふべからずと、弓に矢を
 打ち番ひ、南無八幡大菩薩、此の的をはづさせ給ふなと、心に念じ
 能く引きて、矢聲を掛けて放ちければ、願の功力の御威光かな、要

目際よりふつと射切り、扇は空中へ舞ひ上る、沖には平家船を、叩
 いていと感じ入り、陸には源氏轡をならべ、船を叩いて感せぬも
 のはなかりける、平家は敗軍と定まりて、源氏方三度の勝鬨擡と上
 げければ、痛はしや平家方は、皆思ひくく西國指して落ちて行く、
 中干切り、心の中こそ不憫なれ、宗高は外に功名数多あれど、斯程の功名は始
 めてにて、名を末代に残し置く、源氏の御代こそ目出たけれ。

吹雪の敵

地 力山を抜き、氣世を蓋ふは、我が北門の鎮なる、歩兵第五聯隊なり、
 大干 巴と降りしきる、雪を馬前の塵と見て、拂ひつ進む二百餘騎、
 明治三十あまり五とせの、初月末の東雲に、鋒をたてたる霜柱、馬
 の蹄に蹴立てつ、向ふは何處雪の城、田代をさして急がる、後
 れ先き立つ世の人は、幸か不幸か辛畑を、過ぎてぞ來つる田母木野
 を、眞白に染めて大峠、小峠風吹きまくる、吹雪の音は武士の、取

いし弓弦の音の如、射出し白羽の雪の矢の、射抜かば射抜け我腕を、
 氷の劍霜の鎗、突き貫かば突きて見よ、忠勇義烈の此の腸を、如何
 なる艱苦も大君の、御爲と共に國の爲め、進め進めと下知すなる、
 劍光霜もかゝやきて、威風鋭き勇將の、下には弱卒あるべきぞ、渦
 まき返す雪のあり、蹴るや吹雪の音凄く、霰の礫雪の丸、左手に拂
 ひ右手に受け、挑み戦ふ其中に、寒風骨や切れにけむ、凍傷破れ逆
 る、血汐に雪も色をかへ、ひるむ模様もしばしにて、尙繰り出す雪

の軍、幾重ともなく取り圍み、黑白も分かずなりけり、地猛虎におれ

ぬ將卒も、終には休らふ燧山、燃さむ妻木も濡れ果て、中干雪の露營

に夜を更かし、假寝の夢も結び兼ね、明け行く空は猶白く、積れる

雪は閉されつ、地安木の森も長森も、近しと聞けど乗る駒は、中干倒れ倒

れて進みかね、無念やる方なくくも、再びこゝに日は暮れぬ、起

き出で見ればあな哀れ、篔深に立ちし矢の如く、髪は千筋に凍りつ

地眼を開き齒を噛みて、あへなくなりし兵もあり、

國の爲め雪と戦ひ倒れても

功勳は高し陸奥の空

地弓矢八幡神かけて、今日を限りの武運をも、守らせ給へ我は今、最

後の隊伍整へて、亂れぬ列を世に止め、大干魔軍の圍み衝き破り、斃れ

て後に止まむのみ、來れと叫ぶ隊長は、中干滿身渾て膽ならん、斯かる

時には我が軍紀、亂れはせねど自ら、中干後れし兵は忽ちに、崩雪の下

に埋められ、地進みし兵は崖に落ち、跡に付き添ふ下士卒が、頼み切

つたる隊長も、紅蓮の氷に閉ぢられて、吟替呼吸さへ通はずなりければ、
 親に離れり雛鳥の、尾花打ち枯れし心地せり、腸凍りて死するとも、
 我が隊長は棄て難く、纏へる毛布脱ぎ取りて、屍にかけて下士卒の、
 心の中こそ健氣なれ、地あはれ末期の際までも、身を忘れても忘れざ
 る、忠義の道の一筋に、思ふ心の深ければ、雪千丈も猶淺く、中千切り八甲
 田山も猶低し、

風是如刀雪如矢

孤軍欲破苦寒圍

銀城一夜將星墜 二百雄魂呼不歸
のいうことよべどもかへらず
地嗚呼陸奥の第五聯隊、雪の魔軍と戦ひて、彼が包圍に落ちぬれど、
 たてし偉勳は敷島の、中千日本心の花ならん、地綾に畏き大君は、御衣の
 袖をば絞られて、慰問の臣を遣はされ、大丈夫なれや國民の、猛猛き
 鑑と愛でましぬ、切たけき鑑と賞でましぬ。
威威海衛

地名も高き、渤海灣の咽喉なる、威海衛の戦ひに、我聯合艦隊司令官

伊東中將の、手足の如く率ゐたる、水雷艇の功績は、聞^切くも勿々勇^一ましや、敵の艦隊勇々しくも、威海衛の要害に、防材固く敷設して、
 灣内深く潜みつゝ、戦ふさまも非ざれば、吾^地が聯合の艦隊は、朝の
 雨雪に身を浴し、夕の風に梳り、たゞ遠近と取り巻きて、空しく時
 日を過せしが、我が陸軍は日島と、劉公島を除く外、所々の砲臺攻
 め取りたりと。信號の旗を見て、伊東司令官は、急に水雷艇隊の司
 令を召し、^{中干}水雷攻撃を命ずれば、^地藤田少佐今井大尉の各司令、姿勢

を正して申す様、^{中干}そは我々の望む所なれど、僅防材の切り目を、
 暗礁多き海なれば、誓つて功は奏せんもの、^地水雷艇は悉く、^再び
 茲に歸るまじ、去らばとばかり立ち上り、誠忠面に現はれしを、^司
 令長官も坐るに感じ、^地落す涙も國の爲め、^{中干}思ひ切つて、^一別^一ける、
 夜も早や更けて月影は、威海衛の山に隠れ、^地黑白も分かぬ眞の闇、
 敵兵夢を結ぶ頃、^崩我が水雷艇は、^三艇隊を先鋒、^百尺崖の此方
 より、浪を蹴つてぞ進みける、^其勢は矢の如く、^港灣内に衝き入

れば、斥候の敵艦之を知り、信號の光きらめくや、灣内俄に騒ぎ立
 ち、打出す速射の砲丸は、雨か霰か降る中を、我が艇隊を物ともせ
 ず、忠義に身をや捨小舟、縦横無盡に馳せ廻る、第九號艇は素早く
 も、巨艦間近に進み寄り、魚形水雷を發すれば、水煙一度に控と上
 げ、命中の音、天地も裂けんばかりにて、艦隊半ばを沈めける、其地
 翌夜の夜も此處彼處に、水雷の音凄し、斯く金城鐵壁と頼みたる、
 旗艦定遠を始めとし、來賓威遠も沈められ、戰鬪力も盡きぬれば、

丁提督は思ふやう、斯くなる上は是非もなし、兵士ばかりは助けん
 と、頃は明治の二十八、二月十二日の朝風に、靡くや力なくくも、
 白旗たて、降伏の、使節の船ぞ見えにける、武夫は物の哀れを知る
 とかや、伊東司令長官は、丁提督の請を容れ、聊心を慰めんと、
 贈物をぞ遣はさる、丁提督は悄然として、吾事已に終れりと、心靜
 に自害して、武士の道をぞ守りける、

百萬艦艦群似雲
まんのもうどうむらがつてくもににたり

旭旗所指絶二妖氛
きよくきのゆりさすところ えつふんをたつ

江流不滅英雄恨

空吊當年丁將軍

吟替 嗚呼昨日までも今日迄も、清國に錚々たる北洋艦隊の司令官、丁汝

昌とも仰がれし身の、斯くなり果つるは敵ながら、又と得難き英雄

の、末路の程こそ是非なけれ、茲に威海衛を占領し、砲聲全く静ま

れば、風雲忽ち一變し、威海衛の淵に渦巻きし、旗艦鎮遠を始めと

し、濟遠平遠廣丙號、其他砲艦數十艘、橋頭高く雨を呼び、雲を起

せし黄龍も、大和劍に角を絶ち、忽ち旗は日の丸の、輝きわたる海

軍旗、君が御稜威は天が下、仰がぬものこそなかりけれ、仰がぬものこそなかりけれ。

新不如歸(上)

地 都は花に早けれど、逗子のあたりは若葉山、櫻花咲き初めさりあへ

ぬ、山また山に白雲を、かけし卯月の始め方、海原遠く見渡せば、

安房や相摸の山々や、大島影に立つ煙は、雲か霞か見え分かず、こ

不動堂の岩の上に、腰打ち掛けて語るなる、脊の君武男は海軍少

尉さうしにて、妻つまは浪子なみこと呼ばれける、杵思きしの中の妹いも春連はるなみ、女波なみ男波なみの打う
ちかへて、岸きしを洗あらふを見るにつけ、定めなき世よの其様そのさまも、我身わがみに思おも
ひくらべられ、慰なぐさむ夫つまの右手めてを執とり、吾わが唇くちびるに押しあてつ、手てには
輝かがやく結婚けつこんの、贈物おくりものなる金指輪きんゆびわ、浪子なみこは涙なみだに曇くもる眼めに、熱あつき涙なみだを流ながし
つゝ、あゝ懐なつかしの我が夫おつとよ、變かはり給たまふな變かはらじな、天てんにありては比
翼よくてう鳥ち、地ちには連理れんりの枝えだたらんと、交かはす言葉ことばの胸むね如何いかに、山やまは霞かすみの衣きぬ
を更まへ、木々きぎの梢こしげはみづえさす五月ごがつの初旬はじめ、武男たけなの乗込のりこむ其艦そのふねは、

聯合隊れんがふたいの演習えんしゆに、加くわはる事こととなりしかば、暫時しばしの暇いとまつ告いげなんと、武
男たけなは又またも訪おとづる逗子さとの里さと、互たがひに堅かたく握にぎる手ての、思おもひを籠こもる別わかれ道みち、浪なみ
子こは手巾はんけちふ振はりながら、早はやく歸かへつて頂戴ちやうたいと、いふ聲こゑのみは暗やみを縫ぬひ、
後あとを慕したふて咽むせび來きる、片割月かたわれつきは冷ひやかに、松まつの梢こしげにかゝりけり、武男たけな
の出發たちし其後そのちは、病やめる浪子なみこは猶更なほさらに、心細こころほそさの遺瀨やるせなく、長ながく思おも
ひし日ひ又また日の、一月餘ひとつきあまりは早はやや經たちて、良人よきとの歸期ききの近ちかづけば、い
と樂たのしげに待まち居ゐたる、門邊かどべに一日ひとひ訪おとづれし、叔母おとなる人ひとに伴ともなはれ、

事の善悪をば知らざれど、慈き父に逢はんとて、都をさして歸りけ
る、運命の坑人を待つ、運命に歩す人知らず、あはれなる哉浪子嬢、
相思の戀も相愛も、毒蛇の舌に咀はれて、圓鏡再び圓からず、澄み
たる月は雲蔽ひ、匂へる花は風散らす、實にや無情の浮世なれ、實
にや無情の浮世なれ。

新 作 不 如 歸 (下)

地 昇る朝日に花やかに、玻璃の窓にさし込みて、山は朝霧白けれど、

澄み渡りたる秋の空、臥床の上に横はる、武男は今し眼を開き、又
眼を閉ちて思ひける、我黄海に傷負ひ、此處佐世保なる病院に、入
りて早くも一月餘、思へば那時砲弾に、傷つき我を失へど、たい
此上は速に、負傷の癒えて戰場に、歸らん時を待てるのみ、風雨は
已に過ぎたれど、心の海に餘波は猶、残りて浮ぶ其記憶、浪子や今
は如何にせし、浪子を思ふ其毎に、宛ら遠き野の末に、悲歌を聞き
けん心地して、たい懐しく哀しくて、松風淋し返子の濱、二人が間

の其愛は、死だも劈く能はじを、況して區々たる其情の、世は今如
何になすとも、彼女は素より我妻よ、病癒へなば一度は、東都に
歸り母に逢ひ、浪子を訪ふて心をば、語りて彼を迎へなむ、唯生死
共我妻は、彼女と思ひて纒にも、自ら慰め心には、浪子を偲ぶのみ
なりき、秋は此處にも紅に、照れる櫻の葉は落ちて、香華の煙立ち
昇る、青山墓地の奥津城は、現と夢と相和して、人の哀歌を奏すの
み、武男は昨日歸り来て、今日しも此處に最愛の、其亡人を吊へば、

萬感胸に漲りつ、あはれ三年の幻影は、泪の狭霧に浮びつ、新婚
の日や伊香保宿、不動祠畔の誓ひ言、逗子に別れし其夕、山科に見
し其れの日、次第に心に映り来て、早く歸つて頂戴の、言葉は耳
に残れども、一度歸れば妻ならず、二度歸れば世の人ならず、あゝ
浪さんは何故死せしと、吾にも知らず言ひなして、持て來し白菊挿
み、衣兜探りて取り出だす、愛しき浪子の絶筆を、今日受取りて讀
みたりし、武男の心如何ならむ、折しも來蒐る人のあり、武男は誰

の其愛は、死だも劈く能はじを、況して區々たる其情の、世は今如
何になすとも、彼女は素より我妻よ、病癒へなば一度は、東都に
歸り母に逢ひ、浪子を訪ふて心をば、語りて彼を迎へなむ、唯生死
共我妻は、彼女と思ひて纒にも、自ら慰め心には、浪子を偲ぶのみ
なりき、秋は此處にも紅に、照れる櫻の葉は落ちて、香華の煙立ち
昇る、青山墓地の奥津城は、現と夢と相和して、人の哀歌を奏すの
み、武男は昨日歸り来て、今日しも此處に最愛の、其亡人を吊へば、

ぞと見返れば、中干浪子の父の中將の、地み墓の前に立てるなり、互に手
をば握りつゝ、二人の涙はハラ〜と、墓標の下にぞ落ちにける、
墓標の下にぞ落ちにける。

月 花

地 月と花とは昔より、誰が樂まぬものやある、中干誰悦ばぬ人やある、大干
はさりながら月花も、地心につれて憂事の、切種となれるも多からむ、
足柄山の松風に、吹き合せたる簫の音も、是より遠く奥州に、軍と

なれば身の末は、死ぬるか生くるか白河の、關をば雲や隔つらん、
勿來の關の春の暮、駒を止めて眺むれば、都の空は花曇り、鎧の袖
に散りかゝる、中干櫻の雪は將軍の、地鬢の霜より猶白し、地戟の枕に夜は
なれて、秋の哀れも知らざれど、中干越山月のいと白く、雲間を渡る雁
が音も、都の空へ歸るぞと、地思へば我も懐しく、花の都は荒れ果て
、何處か我が身の置き處、中干今宵一夜の宿頼む、櫻の露に袖濡れて、
滅亡時に極まりし、切平家の末ぞかなしけれ、大干倭人輩の讒により、諫

め○の○言○葉○容○れ○ら○れ○ず○、二○人○と○も○な○き○賢○人○は○、筑○紫○の○浦○の○佗○住○居○、御
 衣○を○拜○し○て○涙○な○る○、心○の○底○や○如○何○な○ら○む○、我○が○君○今○は○賊○の○爲○め○、遠
 き○島○地○に○行○き○給○ふ○、無○念○の○心○や○る○瀬○な○く○、十○字○を○記○す○櫻○の○木○、我○が
 赤○心○を○申○さ○ん○に○、な○ど○か○他○言○を○要○す○べ○き○、中○干○、月○の○光○や○花○の○香○や○、幾○萬
 年○の○經○る○と○て○も○、更○に○變○り○は○な○き○な○る○に○、常○な○き○も○の○は○世○の○治○亂○、
 月○を○見○て○醉○ひ○花○を○見○て○、眠○れ○る○春○の○手○枕○の○、只○一○場○の○夢○の○間○に○、移
 る○興○廢○存○亡○の○、世○の○成○行○を○無○情○な○れ○、若○し○も○世○運○拙○く○て○、上○に○は○君

を○煩○は○し○、下○に○は○民○に○苦○勞○か○け○、國○の○亂○る○、其○時○は○、月○の○光○は○輝○く
 も○、花○の○色○香○は○匂○ふ○と○も○、な○ど○樂○の○あ○る○べ○き○ぞ○、去○れ○ば○世○間○の○諸○人
 よ○、大○干○、真○心○こ○め○て○引○き○起○し○、國○の○光○を○東○海○の○、月○よ○り○も○尚○輝○く○、國○の
 譽○を○三○芳○野○の○、花○よ○り○も○尚○芳○し○く○、中○干○、す○る○こ○そ○今○の○勤○な○り○、誓○ふ○て○斯
 く○も○な○せ○し○後○、樂○し○き○月○見○を○し○て○見○た○や○、樂○し○き○花○見○を○し○て○見○た○や○、
 蓬○萊○山
 目○出○た○や○な○、君○が○惠○み○は○久○方○の○、光○長○閑○き○春○の○日○に○不○老○門○を○立○ち○出

中千切り、四方の景色を眺むれば、大千の小松に雛鶴住みて、谷の小川に龜
 遊ぶ、中千代に八千代にさいれ石の、巖となりて苔の蒸す迄、命なが
 らへて雨土塊を破らず、風枝を鳴らさすと云へば、又堯舜の御代も
 斯やあらん、斯程治まる御代なれば、千草萬木花咲き實り、五穀成
 就して、上には金殿樓閣の甕を並べ、下には民の竈厚くして、仁義
 正しき御代の春、蓬萊山とは是とかや、君ケ代の、千歳の松も常盤
 色、替らぬ御代の例には、天長地久と、國も豊に治まりて、弓は袋
中千切り、四方の景色を眺むれば、大千の小松に雛鶴住みて、谷の小川に龜
遊ぶ、中千代に八千代にさいれ石の、巖となりて苔の蒸す迄、命なが
らへて雨土塊を破らず、風枝を鳴らさすと云へば、又堯舜の御代も
斯やあらん、斯程治まる御代なれば、千草萬木花咲き實り、五穀成
就して、上には金殿樓閣の甕を並べ、下には民の竈厚くして、仁義
正しき御代の春、蓬萊山とは是とかや、君ケ代の、千歳の松も常盤
色、替らぬ御代の例には、天長地久と、國も豊に治まりて、弓は袋

中千切り、劍は箱に納め置く、諫鼓若深うして、鳥も中々、驚く様ぞなかりける。

上村艦隊

地目出たやな、仁義の軍に敵はなし、浦鹽艦隊いく度か、我が近海を
横行し、船を沈め人を殺し、兇暴無残の振舞を、神人共に怒りしに、
天運やがて循環し、今其最後ぞ哀なる、八月十日の海戦に、敵の旅
順艦隊は、浦鹽さして逸出し、皆さんぐに撃ちなされ、此處や彼

處に逃込みしが、浦鹽艦隊策應し、相會せんも計られずと、上村第
 二艦隊に、海峽扼守をぞ命せらる、地上村艦隊は是より先、朝鮮海峽
 遮斷に任じ、浦鹽の敵艦出づる毎に、千辛萬苦を嘗めながら、屢敵
 に逢はざりし、日頃の無念やるせなく、腕をさすりて憤慨も、時の
 至るを待つうちに、大干此の天命を受けしかば、うれしや今ぞ目的を、
 達せんものと雀躍し、地海峽さして引き返す、雲煙曉に動くにも、
 天未眦を決しつゝ、黑白も分かぬ闇の夜も、怒濤の響きに心を碎

き、旗艦出雲を先頭に、吾妻常盤これにつき、磐手は殿艦列を正し、
 連続晝夜の分ちなく、一目も眠らで海上を、警戒をさくゝ怠らで、
 敵艦隊を搜索す、時は八月十四日、夜はほのくくと明くる頃、蔚山
 沖に至りしに、旗艦出雲の左舷なる、一萬メートルの距離に於て、
 單縦陣の敵艦三隻、糶糊の間に現れたり、崩れ素破やよき敵ござんなれ、
 逃しはやらじと若殿原、意氣躍つて天を衝き、毛髪たつて劔の如し、
 智勇すぐれし上村長官、三須司令官を始めとし、武富吉松藤井、

伊知地の各艦長、大磐石の如く屹立し、敵は袋のものなるぞ、はやりてゆめ亂射すなど、大戦闘旗をひるがへし、右舷に轉じ追かけつ、重砲一發轟くや、各艦一度に打ち出せば、敵はあはて、逃げんとし、進路を轉じて北に向ひ、此處を詮度と應戦す、一萬餘噸の大艦が、十八湮の速力にて、追ひつ開きつ大海に、操縦自在廻轉の、妙を極めて戦ふは、世界の戦史にためしなく、雷電飛んで鯨鯢をどり、海若驚ろいて龍神怒り、天地も震動せんばかり、凄まじななんと

いはん方なし、敵は朝日に打向ひ、眼ちらつき不利なれど、我は丁字に敵に對して、思ふが儘に集弾し、命中殊に正確なれば、敵の三艦ことごとく、大損傷を負ひたるが、健氣やロシヤ、グロンポイ、速力遅きリユーツクを、助けんものと幾度か、危難を冒して引返す、折こそよけれ打てやとて、艦隊砲火の集中すれば、黒煙起り破片飛び、火炎頻りに立昇る、中にも彼のリユーツクは、船體破れ舵機射られ、艦部は沈みて見えしかば、二艦も今は敵はじと、其僚艦

を打捨て、一目散に逃げて行く、折もよし、浪速高千穂馳せ加は
 れば、リユーリックを打任せ、本艦隊は北ぐるを追ひ、きたなし返
 せと追撃す、五時間餘りの激戦に、二艦は酷く打ちなされ、煙突破
 れ艦橋も、見る影もなく打ち碎かれ、水線附近に十餘ヶ所、致命に
 近き傷を受け、全速力を出しつゝ、辛くも烏港に敗走す、こゝに浪
 速と高千穂は、瓜生司令官統卒し、和田毛利の二艦長、砲彈雨の如
 く浴せかくれば、敵もさる者刻一刻に、其艦の沈まんとするを顧
 みる、死力を盡して之に當り、砲身砕けむ夫までは、打てや防げと
 抵抗すれど、夥多負ひたる弾傷に、艦隊次第に傾きて、程もあらせ
 す沈没す、今や最期の際までも、砲火をつぎし勇敢は、天晴敵よ健
 氣やと、味方も舷をぞ叩きける、去程に我艦隊は、追窮なしてと引
 返し、見れば哀れやリユーリックは、影だに見えず乗組の、敵兵海
 に漂へり、上村艦長之を見て、我が日の本の武士道は、敵をも憐む
 習ひなり、凡そ生きとし生ける者、皆助けよとありければ、小鳥を

みる、死力を盡して之に當り、砲身砕けむ夫までは、打てや防げと
 抵抗すれど、夥多負ひたる弾傷に、艦隊次第に傾きて、程もあらせ
 す沈没す、今や最期の際までも、砲火をつぎし勇敢は、天晴敵よ健
 氣やと、味方も舷をぞ叩きける、去程に我艦隊は、追窮なしてと引
 返し、見れば哀れやリユーリックは、影だに見えず乗組の、敵兵海
 に漂へり、上村艦長之を見て、我が日の本の武士道は、敵をも憐む
 習ひなり、凡そ生きとし生ける者、皆助けよとありければ、小鳥を

さへ救ひつゝ、六百餘人の敵兵を、助けて傷者は治療せし、切り仁慈の
 程を限りなき、大干斯かる例しは外國に、争でかあらん我國の、正平の
 昔正行が、渡邊川の故事も、思ひ合せてあり難く、地彼の敵艦が行ひ
 し、兇暴無慘に引きかへて、怨みに報いし徳にこそ、人道の光り輝
 さて、御國の譽をあげにけれ、此役敵艦に會せしは、天佑とやいは
 ん各艦の、働きいとも目覺しく、損害極めて少くて、死傷僅に百餘
 人、全艦隊の士氣ふるひ、將卒慘として驕らず、堂々とし引き上げ

母の教

しは、切り君の御稜威によるとかや、地斯くて蔚山の勝を聞すれば、天皇
 御感斜ならず、萬艱を排して任務を盡し、偉功を奏せしを嘉賞した
 まひ、國民また鬱憤を晴らせりとて、萬歳の聲鳴り渡り、上村艦隊
 の勇名は、海の内外に轟きぬ、切り海の内外に轟きぬ。
地やよ正行よく、まよなき事なし給ひぞ、父が御身を歸せしは、若
 木の繼穂に橋の、切り實のなり出でん爲ならず、大干吉野の山の春の月、光

は見えぬ世なりとも、にしき錦の御旗ひるがへし、地楠氏なんしの一族の、あらむ
 限りは君の爲め、斃れて止めとの御遺言、あだになさじと立歸り、
かき汝妾なんぢめかけに告げながら、其の舌の根も乾かぬに、早くも其事忘れしか、
しの忍び難きを忍びつゝ、切り忠と孝とを全ふし、地君の御心安んぜよ、親の
み御靈も慰めよ、切りまさなき事なしたまひぞ。

錦の御旗

地天照らす、日の影映つる、眞名井の流末清き、瑞穂の國は昔より、

切り忠勇仁義の人多し、大元弘年中ちゅうこうねんちゅうの事とかよ、中後醍醐帝ちうたごていの三の皇子、大塔宮たうみやうと申せしは、ち智勇備れる君にして、地出家しゆつげの身にてましませど、
ち父の御爲め國の爲め、きやくそく逆賊を討ち平げんとおんくわだての御企、はやく早くも賊へ洩れ
 しかば、ひ比叡の奥にもなんど南都にも、み身を置き給ふ事難く、中熊野くまのをさし
おて落ち給ふ、中股肱ここうの臣は誰々ぞ、あかまつり赤松律師あかまつり光林坊、きでら木寺きでらの相摸さかみ三河
ほ房、かたをか片岡かたをか八郎はちろう武藏坊、ひらが平賀ひらがの三郎さんろう矢田彦七、むらかみ村上むらかみ義光ぎこうの九人くにんにて、
かき柿かきの法衣ほふえも笈おひを負ひ、づきん頭巾づきん眉まゆ深くかぶ被りて、せんたつ先達せんたつつくりりてやまに山伏やまにの、くま熊

野詣に装ひたり、龍棲鳳闕に人と爲り、輕軒香車を出でまさぬ、雲
 のまうでよそ りうせいほうけつ ひと けいけんかうしや い うん
 上人の御歩行の、長途如何にと御供の、人々危く思ひしに、社々の
 じやうひとごほかう ちやうどういか おんども ひと々あやぶ おも やしろうく
 御祈り、宿々の御勤め、露も怠り給はねば、勤修をつむる山伏も、
 おんいの とまりく おんつと つゆ おこた たま まんしう やまぶし
 切りむる者更になし、由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ船の楫をたえ、
 みどが ものさら ゆら みなと みわた おきこ ふね かぢ
 浦の濱木綿幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀路の山々渺々と、
 うら はまさ ふいくへ し らぬ なみち な ちどり まぢ やまくべうく
 薄紫の藤代の、松にかゝれる磯の浪、和歌吹上の浦かけて、月に
 うすむらさき ふぢしろ まつ いそ なみ わか ふきあげ うら つぎ
 磨ける玉津島、光を他所に伏し拜み、長汀曲浦の旅の路、心を碎く
 みが たまつ しま ひかり よそ おが ちやうてい まづ くは たひ こころ くだ

習あり、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す黄昏に、
 ならひ あめ ふく こぞん じゆ ゆふべ おく まんじ かね あはれ もよほ たそがれ
 切目の王子に着き給ひ、叢祠を袖に片敷きて、朝家の榮を祈ります、
 きりめ わうじ つ たま さうし そで かたし てうか さかへ いの
 斯くて十津川の戸野兵衛、佐竹八郎たよりして、暫しが程は居たま
 へど、爰にも長くありかねて、高野の方へぞ落ち給ふ、茲に妹加瀬
 こゝ なが な なか ちり かた お たま こゝ いもかせ
 庄司とて、賊に一味の士の、宮をさへへて申す様、此道通し申しな
 じやうじ そく み さむらい みや まを やう このみちどほ まを
 ば、鎌倉よりぞ罪せられん、さは云へ、宮に弓ひく事は、如何にも
 かまくら つみ い みや ゆみ こと いか
 恐れ多ければ、錦の御旗賜はるか、左なくば一人の御供止めて、證
 おそ おほ にしき み はた よ さ ひたり おんどもと しよつ

據にせんと云ひけれど、股肱の臣を一人だに、如何で残し給ふべき
 詮方なくも御旗をば、彼に與へて虎の口、切り一僅に遁れ給ひける、地斯か
 る所に、村上彦四郎義光は、草鞋の緒や切れにけむ、遙に後れたり
 しかば、頓て宮に追ひ附き申さんと、足疾く過ぐる折しもあれ、は
 たと庄司に行き逢へり、家人が持てる旗見れば、正しく錦の御旗な
 り、不思議に思ひ尋ぬるに、事云々と答へけるを、義光之を聞きも
 敢へず、崩れ報と怒りて打ち睨み、こはそも如何に何事ぞ、かたけな忝くも畏く
あ

も、四海の主人に御座します、天子の御子朝敵を、追討あらん其が
 爲めに、御門出の道なるに、汝等如き下郎輩、かゝる振舞なすべき
 かと、持たたる旗を奪ひ取り、大の男を搔き攫み、四五丁許り投げ
 たるは、恰も獅子の荒るゝに異らず、大干此怪力に怖れけん、妹加瀬
 庄司一言も、半句もなくすくみけり、地義光は御旗を肩にかけ、程
 なく宮に追ひつき、御前にひれ伏して、事の次第を具に申し上げし
 かば、宮は喜び古の、北宮勳が勇氣にも、立ちまされりと賞でま

しぬ、義光は勇のみならず、吉野の奥の戦に、中干宮に代りて打死す、
よしみつ い う よしの おく た かひ みや かは うちじに
地御旗に打ちたる月と日と、中干光争ふ忠臣の、義士とたへて後の代に、
みはた う つき ひ ひかりあらそ ちうしん ぎし のち よ
地君に仕ふの人臣の、鑑とこそは仰がるれ、切リ鑑とこそは仰がるれ。
きみ つか じんしん かぢみ あふ あふ あふ

葉山の御夢

地日嗣の皇子の御代永く、國の光りも日に増せば、八百潮波も静やか
ひつき みこ みよなが くに ひか ひ ま や しほなみ しづ
に、大八洲國謠ひつゝ、切リ葉山の磯にめぐらん、大干長汀曲浦月淡く、
おほや しまくにうた は やま いそ ちやうていきよくほつきは ちやうていきよくほつきは
梅吹く風のかほる夜半、皇后の宮が時しもぞ、大殿こもる御間近く、
うりふ かぜ よはん きさき みや とき おほその みま ちか

額づく人は誰なりや、地僕早く海軍に、微力をいたしまつりしが、お
ぬか ひさ たれ やつかれはや かいぐん ひりよく
ろしやと戦ひ開きなば、今は亡き身も魂魄は、皇軍艦に宿りゐて、
ろしや たしか ひら いま な み たまひ みいくさ やど
御國に盡す丈夫を、護りまつらん斯くいふは、坂本龍馬に候ふと、
みくに つく ますらを まも か さかもとりうま さふら
聞え上げつる程もなく、暗きに消ゆる白き袖、みそなはしたる其由
きこ あ ほど くら しろ そで そのよし
を、供奉の女官にのたまひて、古人の圖を召させ、見ますに是ぞ前
くぶ ちよくわん いにしへひと づ め み これ さき
の夜の、夢にまがはぬ面影よ、あはれ尊き正夢や、中干かしこき春の御
よ ゆめ おもかけ たふと まさゆめ はる おん
夢や、國の母とて片時も、大御心の放れねば、御夢に入りし吉き瑞
ゆめ くに は かたとき おほみこ はな みゆめ い よ さが

か、地葉山の磯に寄る波の、寄せ返しては目出たさを、八洲の外へ傳
 へつゝ、四方にあふるゝ大稜威、中千切り君は千代ませ八千代ませ、思へば
 昔笠置山、雨に御袖を打かつぎ、常盤緑の楠を、帝得ましゝ其の夢
 と、この夢いづれ靈しからぬ、地御夢のしるし甲斐ありて、一度たて
 ば三軍の、進むに當る敵はなく、常に新に明かに、中千切り國威かやく亞
 細亞海、地葉山の磯による波の、よせ返しては目出たさを、八洲の外
 に傳へつゝ、四方にあふるゝ大稜威、君は千代ませ萬代にませ、切君

は千代ませ萬代にませ。

俊しゆん 寛くわん (二段)

地あだまもる、筑紫の果の薩摩湯、鬼界ヶ島の荒磯に、治承元年夏五
 月、切流され給ひし人々は、大右近衛少將成經、檢非違使平入道康頼、
 法勝寺入道、俊寛僧都の三人なり、地憂き艱難を此島に、送り給ふ
 其の中に、中千切り大赧の命をぞ傳へらる、地思ひもかけぬ事なれば、あら有
 難き御説やと、三人齊しく跪き、恭しくも令状を、押し戴きて成經

は、嬉し涙に袖濡れて、聲もふるへてさらりと、読み給はぬ形勢
 を、康頼執りてやうくに、読み上げ給ふ趣は、中干此度中宮御産の御
 祈禱に、非常の大赦行はるにより、鬼界ヶ島の流人の中、成経康
 頼を赦免すと、地読み給ふ時俊寛は、あつと驚き頭をあげ、何とて
 某の名を読み落し給ふぞと、言葉急しく尋ねるに、康頼も打ち驚
 き、こゑ聲うるみ、實に訝しき事なれど、御名は更に見え侍らず、俊寛
 聞きて、扱は筆者の誤りか、今一度讀ませ給へとありけるを、使の

元康進み寄り、中干某都にて承はり候も、成経康頼の二人は御供致せ、
 俊寛は一人此島に、しゆんくわん残し申せとの御事なり、地嗚呼こは如何に何事
 ぞ、罪も同じく配所も同じ、非常も同じ大赦なるに、獨り誓の網に
 洩れ、沈むは何の因果ぞや、吟替今日までは、三人一所にありてすら、
 さも恐ろしくすさまじき、おそ荒磯島に只一人、離れて海士の捨草の、
 浪の藻屑にあらねども、なみ寄る邊も知らぬ憂身やと、あま歎くに甲斐も渚
 なる、千鳥と共に鳴くばかり、ちどり思にあまる俊寛は、地先に讀みたる卷

物を、幾度となく打開き、後練り返し見給へど、中干成経康頼とあるばかりにて、しゆんくわん俊寛とも僧都とも、そうづ書ける文字は更になし、地こは又夢か
幻か、夢ならば、さめよくと宣ひて、切リ獨り涙にくれたまふ、なだ

玉兔晝眠雲母地

金鶏夜宿不萌枝

寒蟬抱二古木

鳴盡不回頭

といふ詩の心は、よくも俊寛僧都が身の上と、切リ今こそ思ひ知られた
り。

俊寛 (二段)

地去る程に、時刻移りてはかなはじと、かちこ楳子の言葉にせかれ来て、な名
残は更に盡きねども、中干成経は夜の衾を、やすより康頼は法華經一卷を、中干切リ各形
見に残し置き、大干様々慰めまゐらせて、中干船に乗らんとし給ふを、地俊寛
袂に縫りつく、中干元康聲を荒げ、僧都は叶ふまじと言ひ放つ、地嗚呼う
たてやな公の、おほやけ私といふこともあれば、むかせめて向ひの地なりとも、
情に乘せて連れ給へと、なみだ涙を袖に包み兼ね、か宣まふ聲の終らぬに、

哀れや無情の楫子共は、中干切り、櫓を振揚げ打たんとす、地俊寛今は叶はじ

とや思ひけむ、中干縫る袂の手を放ち、一時は宿へ歸らむと、踵は後へ

返せども、かへ歸らぬものは心にて、かちこ楫子の無情も元康の、怒る言葉も

打ち忘れ、またた又立ち寄りて出船の、つな綱に取りつき引き止る、地楫子共綱

を押し切つて、お船を深みへ押し出す、せんかたなみ詮方浪に躍り込み、お船よ々々

と呼ばはれども、返す模様もあらざれば、力及ばず俊寛は、故の渚

にひれふして、吟替彼の松浦小夜姫の、なげき歎も我に及ばしと、かなし悲み給ふも

哀なり、あはれ時を感じては、はな花にも涙を濺ぎ、わかれ別を惜みては、とり鳥にも心

を動かすといふこともあれば、またひと又人として、なが長き別の悲みを、し知ら

ぬ者こそなかるらめ、地されば成経も康頼も、なだ涙ながらにさし招き、

我等都に上りなば、われらみ善き様に取做して、なやがて御迎へにまゐるべし、

心強く待せ給へと宣ふ聲も幽なる、吟替頼を濱の松陰に、き聞くや如何に

と夕波の、ゆきな寄するまに、しゆんくわん俊寛は、た只だ手を合せ頼むぞと、よ呼ばは

る聲も呼ぶ聲も、こゑ次第々に遠かる、ふね船は幽に人影も、かすか消えて見え

なく爲りにけり、消えて見えなくなりけり。

王昭君

地問はず語り、誰聞けとてか打ちわぶる、身の憂さを知れ山時鳥軒の

草、忍ぶとすれど秋更けて、齡果てたる蟲と我かな、夫れ一生の別

には、露の命も惜からず、風にまかする窓の燈火、悲み骨髓に通

来て、形は憔悴と衰へて、地只何事も妹脊の契り、淺衣の薄き縁と成

り果て、哀れ果敢なき我が身かな、一度君に別れては、再び相逢ふ

事もなし、隔て盡せし千山萬水の雲、終夜心にかけて思へども、

君に逢ふ世の夢にだに見ぬ、今世の中に物思ふ身は、我等ばかりと

思へども、昔を傳へ聞く時は、王昭君の其の古へは、漢の帝の美人

にて、御寵愛は類なし、殿上にも並びなく、まことに雲の上人に

て、さしも優々しくをばせしに、如何なる人の讒言にや、胡國とい

へる遠國の、ゑびすの在所に、流され給ふぞ哀れなる、痛はしや王

昭君今は早や、悽み慣れし花の都を、吟替涙と共に立ち出づる、或時は

船に召され、又或る時は、殊に峻峻なる山を踰え、餘り我が身の悲しきに、駒の上にて琵琶をも弾じ、古郷戀ひしき歌の曲、さまざま朗詠したまへば、地風聲水音ことごとく、皆腸を断つとかや、今は帝も聞し召し、御愁嘆の餘りにや、忝なくも龍顔に、御涙浮ばせたまふぞ有り難き、されど又綸言汗の如くにて、再び召し返さるゝ御沙汰もなし、彼は唐士これは我が朝、又は胡國夷の朝に、春は藁屋の夜の雨、乾坤萬里と隔つれど、物思ふ身は異ならず、流れも同じ水

なれど、淵瀬と變る如くなり、たゞ何事も杜鵬血に啼きて、何んぞ腸を断たんとかや、暫し口を結んで只三春を、過さんには由なかりける。

月照

相扼投海無後先
 豈計波上再生縁
 回頭十有餘年夢
 空隔幽明哭墓前
 華の都も秋は猶、夕淋しき風情なり、名は流れたる清水や、落ち來

る瀧の音羽山、切り秋の葉色のみぞ毎に、大千散るや紅葉のちりくくと、乱れ行く世の浪花江や、葦のさはりは繁くとも、尚世の爲めに身を盡し、地盡さんとても筑紫潟、波影岸の浪ならん、操をいつか深緑、色は返らぬ青柳の、驛路を越して香椎潟、たよらの橋を打ち渡り、千代の松原千代かけて、萬代かけて君が代の、神に歩みを箱崎の、社にかけし四つの文字、筆の主人をよく問はゞ、延喜の帝かしくくも、御手をば下し給ひつゝ、爰も昔は石だゝみ、重ねくし白波の、よ

せし昔を忘れじと、恨み浦曲の片擲、掛けて歎くも憐れなり、濡衣塚の濡れ衣、我が身に着たる心地せり、地やがて博多の借住居、爰も浪風騒がしく、又行く方は薩摩潟、沖の小島にあらねども、心細くも都にて、誰か哀れと思ふらん、地たよる心は筑紫潟、一人の外に打ち明けて、語らふ人も浮枕、浪路隔て、野間の關、關守にとめられ、又舟に、乗る間も夫とよせ仇に、浪に揺られて行先は、黒の瀬戸で名に浦や、頓て鹿兒島籠の鳥、翼たゝみて潜みしが、又木枯の風

に驚きて、日向をさして船出せし、日は神無月望の夜の、傾く月と
 諸共に、照り輝きて雲井なる、身は大君の爲にとて、爰に光りの薩
 摩潟、如何なる縁さきの世に、契りも深き船の中、底の藻屑となり
 ぬるを、乗合ふ人も船人も、罹の雫の露程も、さりとは知らぬ白浪
 の、立騒げ共甲斐ぞなき、尙東雲の明鳥、鳴くより外はなかりけり、

召集令

地 都も遠き片山里に、柱傾き軒朽ちて、見るも哀れな賤が家、母は

病の床に伏し、妻は終日飢に泣く、賤が伏屋の門邊にも、召集令は
 下りけり、臥したる母は涙ぐみ、いまはの枕をばだて、行けや我
 が子や國の爲め、君の御爲めに候へば、今はた何をかためらはん、
 行けや行けく我が子よと、涙ながらに勵ませば、妻は門邊に夫送
 り、案じたまふな我夫よ、妾の生命は消ゆるとも、母の看護は怠ら
 ず、あかぬ別れは盡きねども、御國の爲には是非もなし、行けや我
 が夫國の爲め、仇なす敵を討ちてよと、夫を勵ます言の葉の、心の

中や如何ならん、大千懷おこひ起おこせば我が父も、御國の敵と戦ひて、終に遼
 東の露と消え、我が同胞兄弟か、肉と血をもて贏ち得たる、遼東還
 附も彼が爲め、地いかでか討たで止むべきぞ、射抜かば射抜け我が腕、
 死して護國の鬼となり、敵の亡びん夫れ迄に、七度此世に生れ來て、
 御國の敵と戦はん、吟替さらば母上我が妻と、勵ます言葉勵む武士、梢
 を拂ふ秋風に、一度去つて歸らざる、勇士を見送る易水の、昔も今
 も變らざる、君と國との爲なれば、中干切り身をも生命も顧みず、地進むに猛

大丈夫の、心の中こそ勇々しけれ、切り心の中こそ勇々しけれ。

薩摩守忠度

地吹き下す、比叡の山風烈しくも、木曾の義仲早すでに、都に入ると
 聞えゑしが、急ぎ御幸を促して、切り西の方へぞ落ちにける、大千薩摩守忠
 度は、跡見返して家々の、焼け失せぬるを打眺め、
 故郷を焼野の原にかへり見て

末も煙りの浪路をぞ行く

と嘆きつゝ、駒の頭を引き返し、僅に六騎相俱して、五條の三位俊成の、中干門の戸細目に押開き、今は憚る身なれども、運つきたれば一門と、身を西海に沈めんは、鏡にかけて見る如し、地されば世の中静まりて、勅撰のあらん其時に、腰折なれど一首をば、御恵みあらば假令此身は藻汐草、八重の汐路に沈むとも、うれしからんと巻物を、まきもの艘の中より取り出し、俊成卿に渡されけり、

前程道遠 馳二思 雁山暮雲一
せんでいみちとほくはすおもひをかんだんのぼつんに

後會無レ期 露二櫻 鴻臚 晚涙一
こうくわいなしまるるはすえいをこうろのげんるちに

と、駒のあぶみをけはひつゝ、中干切り南をさして行かれける、地俊成卿之を見送りて、あらいたはしや此人は、このひと同じ道ふむ友なるに、今は此世の別れとて、中干切り涙を袖は絞りけり、なみださゝ波や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻ばな

と、千載集に故郷の花と題して、よみほどしらす読人不知と載せたれど、ことば言の花は幾千代の、切り後の世にこそ匂ふなれ。